

平成20年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学FD委員会

はじめに

—あらたな段階を迎えるFD活動—

本学のFD活動は大別すると、各学部が学部単位で自主的に企画し実施するものと、学部横断的に大学全体で実施するものがあります。各学部には人材育成の目標があり、それを担保するものとしてのカリキュラムがありますから、学部・学科の教員集団が、カリキュラムの実効性を高めるために、自主的に独自のFD活動を展開してきていることは、大いに評価すべきことです。

大学教育の潮流は大きく変わろうとしています。それは学習者中心の教育への転換であり、学習結果を重視する教育です。周知のように、2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築」では、そのことが明確に述べられています。今後はFD活動の内容もこの流れにそったものに移行してゆく必要があります。

答申では、「FDは多くの大学に普及しており、平成18年度実施率は約9割となっている」（第3章第1節）としながらも、いくつかの課題が挙げられています。また、FD活動によって、教員の資質能力が「はっきり高まった」と回答した学長の割合は、アメリカが半数であるのに対し、我が国は1割足らずにとどまっている、との国際比較調査も同答申には付記されています（図表3-6）。

これから大学の教員には、教員全体の組織的な教育力の向上が求められます。しかし、これまで、我が国では、大学教員を教育専門職としてとらえ、その職業能力の内容やその開発の方策に関して、十分な研究が行われてきたとはいえません。英国では、Professional Development（専門職教育）の一環として、組織的な大学教員の教育職能開発が進んでいます。高等教育資格課程を大学院レベルで設置し、主に新任教員対象の教育能力証明を授与するまでになっています。

本学のFD活動も、従来の活動を一層充実させるとともに、大学教員の教育職能開発という新たな観点からの研究やワークショップを実施する段階にはいったといえます。

大学FD委員会委員長

教学部長事務取扱 島川 聖一郎

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画及び課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	3
(6) 今後に向けて	4
2. 学部の活動.....	5

II 教員研修

1. プレゼンテーション研修会	
(1) 実施の概要	23
(2) 研修プログラム内容	23
(3) 実施の状況	24
(4) 実施後のアンケートから	24
(5) ディスカッションの実施	28
(6) 実施の成果	37
(7) 今後の課題.....	37
(8) 20 年度プレゼンテーション研修会参加者一覧	39
2. 新任教員研修会	
(1) 研修プログラム内容	40
(2) 実施の成果	42
3. Blackboard@Tamagawa の活用	
(1) 活用事例報告	44

III コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要	54
2. 集計結果及び公表	54

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事要旨	69
2. プレゼンテーション研修会アンケート用紙	77
3. 「コア科目授業評価アンケート」用紙	78
4. 玉川大学 FD 委員会規程.....	79

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、大学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を以下のとおり明確化している。

- ① 玉川の教育理念の実現
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員の育成
- ③ 大学大衆化時代への対応
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）の確保

(2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長事務取扱	島川聖一郎
副委員長	コア・FYE教育センター	菊池重雄
委員	文学部	平高典子
委員	農学部	河野均
委員	工学部	山田博三
委員	経営学部	高千穂安長
委員	教育学部	金井茂夫
委員	芸術学部	林三雄
委員	リベラルアーツ学部	小嶋正敏
委員	学術研究所	切田節子
事務担当	教学部	茂村恭司
事務担当	教育企画部	大野太郎
事務担当	コア・FYE教育センター	山崎千鶴
事務担当	人事部研修センター	柳原達宏

(3) 今年度の活動計画及び課題（平成 19 年度報告書「今後に向けて」より再掲）

- ・大学 FD 研修会の開催を図る。
- ・新任教員研修会を継続実施する。
- ・プレゼンテーション研修会を複数回の開催を図る。
- ・教員相互の授業参観及び研究会の開催を推進する。

(4) 活動状況

主な活動内容としては以下のとおりである。研修会については、本年度も平成 17 年度からの一年次教育の全学実施以来、「一年次セミナー」担当者研修会等を数多く開催した。

学内教職員の意識を高めるための学外講師による講演会の開催や FD 活動調査のため他大学主催等のフォーラムやワークショップ、研修会に教職員を派遣した。

コア科目の「学生による授業評価」は当初の計画どおり今年度も、春・秋学期とも全学的に実施した。平成 14 年度から継続して行っているプレゼンテーション研修会は本年度も 3 回開催し、合計 20 名（初年度からの延べ受講者数は 223 名、平成 20 年 5 月 1 日時点の在職者で受講した累積数は 199 名、全専任教員の 75.16%）の教員が参加した。

また、昨年 12 月に中教審より「学士課程教育の構築に向けて」の答申が出され、これを受け、大学改革の動向の中で、大学に求められるもの、政策の諸課題・方向性など全般的かつ実質的な話を伺うため、学部・大学院の新旧管理職を対象に「高等教育の転換と革新に向けて大学に求められるもの—中教審の諮問・答申をめぐって—」と題し、文部科学省高等教育局企画官によるワークショップを開催した。

なお、大学 FD 委員会は 2 回の開催であったが、詳細として巻末に参考資料（議事要旨）を掲載した。

<平成 20 年度>

5 月 30 日	全私学新聞運営委員会「第 5 回大学改革トップセミナー」教員派遣
6 月 18 日	第 1 回大学 FD 委員会
6 月 6・7 日	大学教育学会 2008 年度大会「大学の「教育力」」教員派遣
6 月 20・21 日	コア科目担当者研修会「成績評価方法」
6 月 23～26 日	「一年次教育国際会議（アイルランド ダブリン）」教員派遣
7 月 14 日	コア科目担当者研修会「授業計画書」
7 月 16～30 日	コア科目（春学期）「学生による授業評価」アンケート実施
8 月 5・6 日	平成 20 年度第 1 回プレゼンテーション研修会
8 月 7 日	山形大学「教養教育ワークショップ」職員派遣
9 月 9・10 日	平成 20 年度第 2 回プレゼンテーション研修会
9 月 17 日	コア科目担当者研修会 講演会「動機の低い聴衆に聞かせる方法」（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室副室長・准教授 佐藤浩章）
9 月 25 日	大学コンソーシアムひょうご「学士課程教育の行方」職員派遣
9 月 26 日	「一年次セミナー101/102」担当者研修会「キャリア・デザインの指導」
11 月 28 日	高等教育情報センター「“Educational Development” と授業・学習支援策」教員派遣
12 月 6・7 日	大学教育学会 2008 年度課題研究集会「学生の主体的な学びを広げるために」職員派遣
12 月 15 日	第 2 回大学 FD 委員会
12 月 16 日	コア科目担当者研修会「シラバス作成」

1月13～27日	コア科目（秋学期）「学生による授業評価」アンケート実施
1月24・25	京都大学「大学教員教育研修のためのモデル拠点形成」プロジェクト発足シンポジウムー日本のFDの未来ー 教員派遣
2月12・13日	平成20年度第3回プレゼンテーション研修会
2月18・19日	平成21年度採用の新任教員研修会
2月28～3月1日	大学コンソーシアム京都「第14回FDフォーラム」教員派遣
3月9日	平成21年度「一年次セミナー101/102」担当者研修会「学生のアウトカム評価ー方法と実践ー」（米国サウスカロライナ大学一年次教育担当副学長補佐 メアリー・スチュアート・ハンター氏）
3月20・21日	京都大学「第15回大学教育研究フォーラム」教員派遣
3月26日	平成21年度「一年次セミナー101/102」担当者研修会「ライティング等の指導法について」（立教大学文学部教授 河野哲也氏） 平成21年度「一年次セミナー101/102」新規担当者研修会「玉川大学の一年次教育について」「授業方法について」
3月27日	講演会「高等教育の転換と革新に向けて大学に求められるものー中教審の諮問・答申をめぐるー」（文部科学省高等教育局企画官 榎本 剛氏）

（5）活動の成果

プレゼンテーション研修会の有用性は、実施後のアンケート調査で「有用性」についてのコメントが一番多いことから明確である。「自分の改善点がわかった」のように具体的に役立った点を述べているコメントが多かったが、「改善の重要性に気づいた」「授業方法を再確認できた」のような「気づき」に関するコメントも目立った。これらは、直接すぐに授業改善に役立つとはいえないが、FDに関する意識の向上には有益であることを示している。

ディスカッションの実施は、“より質の高い教育をしたい”、“玉川大学の価値を高めたい”など参加教員の熱意が溢れる場となり、FD活動だけでなく、組織や施設など多岐に亘るテーマに関する意見交換ができた。学部・学科の垣根を越えて本音で話し合ったことは、単にコミュニケーションが円滑になったということだけでなく、FDに関する共通理解を図るという効果をもたらした。こうして築かれた人間関係が、学部・学科を越えての活動の原動力となっていくと感じている。

コア科目における「授業評価アンケート」は今年度も2回実施し、15年度からで計12回実施したことになる。授業毎の集計結果は各授業担当者にフィードバックしているが、例年通り、全体及び分野集計の平均値を学内のみ対象にホームページで公表した。

新任教員研修会は、開催後のアンケートにおいて、研修内容・資料・講師の説明が「とても充実していた」、「資料が解り易かった」との回答が昨年度より増えている。また、研修に参加して、「大学の設立から歴史と教育理念、特色を理解できた」「大学教員としての仕事の流れをつかむことができた」「教職員同士の交流により、親密になれたと同時に、行き届いた配慮を感じた」「研究上の情報交換ができた」など感想が寄せられ、本研修会の目的を達成できたと評価できる。

(6) 今後に向けて

今年度も新任教員研修会に加え、プレゼンテーション研修会も本学の研修センターとの共催の形式で開催した。平成 21 年度以降も内容と開催回数については研修センターと調整を図りながら充実を図りたい。

また、教員相互の授業参観や研究会は、創立当初より全学に「宗教・講話」を実施しているがこの科目には、各学科の担任や担当者をはじめ多くの教員が参加している。これはいわゆる全学的な科目としての教員相互の授業参観で、参加した教員からの教授方法や学習指導、授業改善等の意見交換を通し、授業に反映させてきている。また、各学部での活動は、平成 17 年度秋学期から開催し、当初は 6 学部中、3 学部が実施であったが、平成 20 年度は 7 学部中、6 学部が実施した。しかし、学科によっては実施できていない現状もあるという結果であったため、平成 21 年度以降は全学部全学科で開催できるよう、さらに啓発活動を推進していきたい。

最後に、プレゼンテーション研修会も 7 年を経て新たなステップを踏み出すべく時期に入ってきたことに触れたい。1 つ目は新規の研修会の立ち上げである。現在の研修会は新任教員を中心に継続するが、すでに受講済みの教員のために学部・学科に特化した別の研修会が必要と考える。これを実現化するための具体策を作成する時期がきている。2 つ目は研修対象者のことである。現在の研修会は専任教員だけを対象としているが、学生にとっては専任も非常勤も関係なく「先生」であることを考えると、枠を広げる必要性があるのではないかと考える。少なくとも「講義」中心に教育する非常勤講師にも研修会参加を可能にする体制を作っていきたい。3 つ目は、プレゼンテーション研修会の担当者である。現在は 1 名が研修を担当しているが、絶えず進化し続ける研修会のためには、より多くの担当者が必要である。これらの担当者の育成も含めて検討していきたいと考える。

2. 学部の活動

平成 20 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人 数	各学部 FD 委員会 の開催回 数	学生による授業評価の実施			学部 研修会	プレゼンテーショ ン 研修会への 参加者数
			実施時期	専任 対象	公表		
文学部	6 名	2 回	春sem終了後 秋sem終了後	全員	学内外 (Web)*1	学外 実施	1 名
農学部	6 名	2 回	春sem終了後 秋sem終了後	全員	—	—	3 名
工学部	—	—	春sem終了後 秋sem終了後	全員	学内外 (Web)*2	学外 実施	6 名
経営学部	3 名	5 回	春sem終了後 秋sem終了後	全員	学内外 (Web)	学内 実施	2 名
教育学部	10 名	2 回	春sem終了後 秋sem終了後	全員	—	学内 実施	1 名
芸術学部	5 名	12 回	秋sem終了後	全員 *3	—	学内 実施	4 名
リハビリアーツ 学部	5 名	2 回	春sem終了後 秋sem終了後	全員	—	学外 実施	3 名
コア科目			春sem終了後 秋sem終了後	全員	学内 (報告書)		

*1:文学部における学生による授業評価結果公表の実施は、比較文化学科である。

*2:学外には総括した内容、学内には全てを詳細に Web と紙面で公表している。

*3:受講者 30 名以上の講義科目を対象とした。

各学部専任教員におけるプレゼンテーション研修会の受講修了状況(平成 20 年度現在)

	20 年度専任教員数 (A)	A の中で受講した人数	割合
文学部	39 名	27 名	69.2%
農学部	47 名	34 名	72.3%
工学部	53 名	37 名	69.8%
経営学部	29 名	24 名	82.8%
教育学部	37 名	29 名	78.4%
芸術学部	41 名	29 名	70.7%
リハビリアーツ学部	22 名	19 名	86.4%
合計	268 名	199 名	74.3%

※専任教員は助手以上で、平成 20 年 5 月 1 日現在の専任教員数。

■各学部における今後（平成21年度～）の計画等について、一覧にまとめる。

	今後の計画
文学部	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的にはこれまでと同様の枠組みでFD活動を続ける。(人間学科・比較文化学科) ・今後、学内のFD活動の機会をより多く設けるとともに、学外で開催される各種FD研修会への積極的な参加を促したい。そして、大学を取り巻く現状を的確に把握した上で、今後の文学部における教育・研究活動を再検討し、かつ、教員個々人の職能成長に努めたい。(文学部全体)
農学部	<ul style="list-style-type: none"> ・新カリキュラムにおける授業評価アンケートの実施(継続) ・授業評価アンケート項目および実施科目(実験・実習・演習科目等)の検討 ・新ITシステムでの活用方法(Blackboard等)の検討 ・平成21年度プレゼンテーション研修会への参加者 ・基礎学力不足の学生に対する対応 ・新大学6号館での研究および教育について ・大学院FD委員会との協調
工学部	<p>「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。ISO9001活動との関係については見直しを行い、より効果的な実践方法について検討する。</p>
経営学部	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容・方法に関する研究(継続)。 ・教員研修会の開催(継続)。 ・専門科目共同授業に関する研究(継続)。 ・リメディアル教育に関する研究(継続)。 ・一年次教育に関する研究(継続)。 ・学生確保に関する研究(継続)。 ・学部・大学院一貫教育についての研究。
教育学部	<p>本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産(知識・方法)の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能(地域貢献、産学官連携、国際交流)などの役割を担える学部の形成を進めるために一層のFD活動を推進する。具体的には、講義科目の授業評価アンケートだけではなく演習、実習、実技科目についてのアンケート用紙を作成し実施すること、そして、アンケート結果を集計し学部内そして学生への還元が課題でもある。</p>

<p>芸術学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ GPA 向上、附加能力向上とともに、社会貢献の機会と場の獲得のための重要課題の一つである就職と、どのように取り組むかを教員、学生双方に認識させていく方途を考えなければならない。特に今の社会情勢から想して3年次早期からのプログラムを検討する必要がある。 ・ 様々な試みの継続と発展を心掛けていく必要があるが、その整理も必要と考えられる。例えば難しい面があるが、教員の業務の偏りをできるだけ減らし、各教員のモチベーションの向上を図る必要もあろう。 ・ 芸術学部のカリキュラムの改編を検討する時期に来ている。メディア・アーツ学科の完成年度でもあることから、これまでの反省に基づき、学士力向上を目指す授業のあり方を各学科とも連携を確認しながら進めることになる。
<p>リベラル アーツ 学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでと同様、FD への意識をより高めるとともに、インターアクティブな相互研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図っていききたい。 ・ 学部運営の「PDCA サイクル」の中に FD 活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを構築していく必要がある。 ・ 中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」を踏まえ、リベラルアーツ学部における「学士力」とは何かについて検討し、それを本学部完成年度（2010 年度）以降の新カリキュラム作成に反映させることが今後の課題となる。

§ 文学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

現在、大学を取り巻く環境の大きな変化に伴い、価値観も多様化し、大学へのニーズも多岐にわたるようになった。一方、未曾有の不況の影響を受け、学生は、将来の予測が非常に難しい、不安定な状況におかれている。かかる現状の認識の下、文学部では、一人ひとりの教員が、文学部および各学科独自の理念や教育目標をいかに実現するかという視点を常に念頭に置きながら職能成長できるような FD 活動を心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に活動に参加できるような体制を構築することを目標にしている。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

文学部長、文学部教務主任、および、文学部各学科主任（人間学科、国際言語文化学科・比較文化学科）を交え、各学科合同の FD 委員会を開催している。また各学科では、学科会あるいは運営委員会等の場で FD 活動の企画・運営に関する事項を審議している。

(3) 20 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

学生による授業評価の実施、教員間の授業参観、学外研修への参加など、それぞれの活動で成果をあげることができた。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

人間学科では、各科目の授業形態（講義中心・発表中心・討論中心）・受講者の人数（クラスの規模）・マルチメディアの活用の仕方（Blackboard の活用：教材・宿題・課題呈示などを含む）に応じて、各教員が授業内容に関する確認テスト、授業のまとめの提出、コメント用紙の提出などの様々な方法により創意工夫を行いつつ、学生の授業に対する理解度、参加度、習熟度、感想、要望等を逐次確認している。これらの学習状況の把握を通して、学生の授業に対する評価を知り、それに対するフィードバックを行っている。

比較文化学科では、今年度は学科開講科目のうち導入科目と専門科目を対象とし、年間を通して各科目一回、学期末に授業評価アンケートを行った。アンケート結果は個別に各担当教員にフィードバックし、授業改善に資すると共に、学科運営委員会で全体の集計分析を行い、本学ホームページに掲載する予定である。アンケート結果は主任がすべてに目を通し実情を把握すると同時に、学科運営委員会でも全体的な傾向を検討し、積極的な活用を試みた。また、比較文化セミナーが今年度から開講されたため、比較文化学科 3 年と国際言語文化学科の 4 年生を対象に、3・4 年次のいわゆるゼミについて、年度末に Blackboard 上で任意のアンケート調査を行い、授業運営委員会で両者の結果を比較検討して、今後の比較文化セミナー運用の参考とした。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

人間学科では、授業参観という形ではないが、学科・学年指定のいくつかの必修科目を複数の教員が担当する中で相互の授業活動を客観的に捉えることを主体的に行っている。複数の教員が必修科目を担当することで各学生の学習状況を多面的に把握するとともに、教員の授業への取り組みについては授業中の具体的な場면을例に挙げて意見交換を行い、教員それぞれが効果的な教授方法や学習指導を積極的に取り入れている。また、授業の開始前には担当教員相互の話し合いを持ち、教材や授業の進め方に関する共通理解をはかり、授業終了後には、授業の評価基準も担当教員間で検討している。このような活動は、授業内容の客観性・透明性を高め、教員相互の授業参観の組織的な取り組みにもつながっていると考えられる。

国際言語文化学科・比較文化学科においても、アンケートで評価の高い授業を学科会で発表し、特に評価の高い授業担当者に創意工夫を発表してもらっている。その授業や複数の教員が担当する科目を中心に、互いの授業を参観する機会をうながし、教授方法の客観的把握と改善に努めた。

④ 研修活動の組織的な取り組み

プレゼンテーション研修会には文学部から2名が参加した。

人間学科では、京都大学での高等教育研究開発推進センター主催「大学教育研究フォーラム」(3月20日～21日開催)へ4名が参加した。

国際言語文化学科・比較文化学科では、龍谷大学で行われた「第14回FDフォーラム」(2月28日～3月1日)へ2名、「大学教育研究フォーラム」へ1名が参加した。

⑤ その他の取り組み

9月には主任会研修にFD委員が参加する形で、文学部の授業の改善・活性化を目的とした授業研究報告書の作成について検討した。

国際言語文化学科・比較文化学科では、授業運営委員会の中で学科の授業についても学科全体の立場から定例的に検討する一方、個別にも、特に同一シラバスを用いる Intensive English や一年次セミナー、新規開講の比較文化セミナーなどで担当者は頻繁にミーティングを行い、緊密に連絡を取り合って授業を展開した。

(4) 今後の予定や課題

人間学科・比較文化学科ともに、基本的にはこれまでと同様の枠組みでFD活動を続ける。

文学部全体としては今後、学内のFD活動の機会をより多く設けるとともに、学外で開催される各種FD研修会への積極的な参加を促したい。そして、大学を取り巻く現状を的確に把握した上で、今後の文学部における教育・研究活動を再検討し、かつ、教員個々人の職能成長に努めたい。

S 農学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

全学 FD 委員会と協調しながら、プレゼンテーション研修会などに積極的に参加し、また、専任教員および非常勤講師は原則学生による授業評価を行う。これらを通じて、教員の教育技能開発を推進する。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

農学部長を中心に主任会メンバー、すなわち農学部長（佐々木）、生物資源学科主任（新島）、生物環境システム学科主任（岩坪）、生命化学科主任（東岸）、学生主任（小野）、および教務主任・大学 FD 委員（河野）の計 6 名がこれに当たる。

(3) 平成 20 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

- ・新カリキュラム科目（平成 17 年度以後）の授業評価を春semester、秋semesterの 2 回行った。4 単位科目については複数の教員が担当している関係上、同科目でそれぞれ担当者別に授業評価を実施した（下記 ②）。また一部演習科目（生命化学科、科学英語）の授業評価も行った。
- ・専任教員（新任教員を含む）のプレゼンテーション研修会への参加（下記 ④）。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

- ・農学部長の方針により、全教員（専任教員および非常勤講師）の協力を求め、新カリキュラム科目について、春semester52科目(延)、秋semester42科目(延)、授業評価アンケートを実施した。ただし実験・実習科目、演習科目、また受講者が 10 名以下の科目については除外した。
- ・平成 20 年度をもって新学科体制（3 学科）が完成したので、今回 1 セメから 8 セメまでの全授業評価を纏めて Web 上で公開する予定である。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

未だ教員相互の授業参観の組織的な取り組みは実行出来ていない。ただし、授業内容・方法の工夫等を共有する上では今後教員相互の授業参観は必要と考えられる。

④ 研修活動の組織的な取り組み

平成 20 年度には、3 名の先生（新任教員を含む）がプレゼンテーション研修会に参加した。3 回目の研修会には参加できなかったが、未参加の先生は 3 名を残すのみとなった。

⑤ その他の取り組み

- ・新学科体制（3 学科）の完成年度であったので、平成 21 年度に向けて 4 年ぶりにカリキュラム等のかかなり大幅な見直しを行った。4 単位科目の 2 単位化、それに伴う科目名の変更とシラバスの検討、および科目名の 3 学科統一を図った。
- ・生物環境システム学科に対し、東京都が始めた資格（ECO-TOP プログラム）の認証を得た。

- ・教務担当によるシラバスの検討、および同一科目間でのシラバスの調整を図った。

(4) 今後の予定や課題

- ・新カリキュラムにおける授業評価アンケートの実施（継続）
- ・授業評価アンケート項目および実施科目（実験・実習・演習科目等）の検討
- ・新 IT システムでの活用方法（Blackboard 等）の検討
- ・平成 21 年度プレゼンテーション研修会への参加者
- ・基礎学力不足の学生に対する対応
- ・新大学 6 号館での研究および教育について
- ・大学院 FD 委員会との協調

§ 工学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部宣言を具現化するために、教育内容や教育環境の向上をはかる。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

- ・工学部 FD 活動の多くは ISO9001 教育マネジメントシステムの活動と連携している。学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観など、主任会、教務担当者会で運営している。
- ・全教員参加による工学部 FD 研修会を年 1 回開催。

(3) 平成 20 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

ISO9001 に関しては、平成 16 年 3 月にマネジメントシステム学科が登録され、平成 18 年 3 月、全学科に拡大された。今年度は、新学科編成に対応した第 10 版マニュアルに改定した。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

- ・平成 14 年度から実施してきた学生による授業評価は、平成 16 年度秋から全教員・全科目に拡大し、平成 17 年度秋からは ISO9001 に対応するためアンケート項目を改定し、体制を諮問委員会である自己点検委員会から教務担当者会に移し、業務体系の中で実行している。
- ・公開：各教員には全体の集計結果と個人の科目別データ。学外 Web には全体の集計結果公開。学内 Web に全情報を公開（科目別集計シートにおいて教員名は除く。科目担当情報により間接対応可能）。学内 Web と同じ内容を冊子として、玄関ロビーで学生に公開。
- ・結果の活用：ISO9001 活動において Semester 末に学科毎に行なわれる授業評価検討会における、各科目ごとの評価、来期への目標設定の中で各教員の授業改善に生かされる。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

平成 20 年度実施件数

機械情報システム学科	6
（含む 機械システム学科、知能情報システム学科）	
ソフトウェアサイエンス学科（含むメディアネットワーク学科）	2
マネジメントシステム学科	2

④ 研修活動の組織的な取り組み

- ・全学 FD 委員会で計画されたプレゼンテーション研修会に各学科から参加した。
第 1 回：大森、菅野、第 3 回：山崎、佐々木、菅原、豊田

⑤ その他の取り組み

工学部 FD 研修会 平成 21 年 3 月 18 日 14:00～17:45

(1) 玉川大学の現状と将来像に関する調査報告

(株)アイエスエイ学校経営コンサルティング部佐々木健氏

(2) 学習支援体制の現状報告 小倉研治教務主任

(4) 今後の予定や課題

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。ISO9001 活動との関係については見直しを行い、より効果的な実践方法について検討する。

§ 経営学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ① 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）の輩出。
- ② 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育の実現。
- ③ 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあつて、運営を維持しうる体力をもった学部の形成。
- ④ 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部の形成。

(2) 学部における FD 活動の組織体

- ① 学部の専任教員全員が参加する FD 会議（年 5 回）を教育研究会およびワークショップの形式で開催。
 - ・経営学部教員研修会（春学期 1 回：専任教員のみで開催、秋学期 1 回：専任教員で開催。）今後とも継続して行う予定。

(3) 平成 20 年度の活動内容

- ① 授業内容・方法に関する研究（継続）。

5 月 30 日法政大学での公開シンポに参加し、FD 活動に対する新しい知見を得た。
- ② 教員研修会の開催（継続）。

6 月 26 日菊池先生を講師とし、専任教員のみを対象として「成績評価方法を考える」のタイトルでワークショップの形式で実施。教員の知識・意識改革に資する結果を得た。

 - ・第 10 回教員研修会（3 月実施）

経営学部の今後の運営についての①経営学部長報告、②今後の FD 活動への示唆として立教大学経営学部の松本茂教授を講師として「授業におけるグループワークの展開方法」の講演③FD 研修会参加報告、④APETIT 参加報告、⑤海外研修報告を行った。
- ③ 専門科目共同授業に関する研究（継続）。
- ④ リメディアル教育に関する研究（継続）。

リメディアル教育（A0 入試合格者および指定校・公募推薦入試合格者対象）の実施。

今回は国際経営学科では高校生が 48 名、父母 22 名、観光経営学科では高校生が 50 名、父母 23 名が参加し、2009 年 2 月 22 日の体験授業と学部・学科ガイダンスとして実施。多数の参加により盛大に行われた。

 - ・第 8 回英語科目担当非常勤教員研修会の開催。

3 月 27 日（金）12 時～15 時実施
- ⑤ 一年次教育に関する研究（継続）。

国際 FYE 会議参加(6 月 22 日～6 月 28 日:アイルランド、ダブリンにて開催)報告

- ⑥ 学生確保に関する研究（継続）。
- ⑦ 学部・大学院一貫教育についての研究。

〈経営学部教員研修会〉

- ⑧ その他の取り組み

・インターンシップ

8月～9月に実施後、国際経営学科、観光経営学科それぞれで検討を行なった。

（４）今後の予定や課題

- ①授業内容・方法に関する研究（継続）。
- ②教員研修会の開催（継続）。
- ③専門科目共同授業に関する研究（継続）。
- ④リメディアル教育に関する研究（継続）。
- ⑤一年次教育に関する研究（継続）。
- ⑥学生確保に関する研究（継続）。
- ⑦学部・大学院一貫教育についての研究。

S 教育学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指している。指導に当たる教員は自らの資質と能力を向上させ、社会に貢献できる人材育成を行うことを通して、大学・学部の競争優位性を高めることが教育学部 FD 活動の目標である。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

教育学部長、学科主任、教務主任、学生主任、教務・教職担当及び FD 委員で組織する。

(3) 平成 20 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

本学部では社会が求める人材を育成することにより、学部の競争優位性を高めることを FD 活動の目標として掲げているが、全教員が担当する教育実習・保育実習での研究授業の訪問指導、またこれらの学校訪問の機会を単に学生指導にとどめるだけではなく、訪問校、園などの学校長や園長、施設長など学校責任者との面談を通して、教育現場の現状や社会的要請と教育の成果や改善すべき点等を調査する機会を FD 活動と位置付けている。さらに、毎年行っている教育長・学校長・園長・施設長などとの協議会において本学部に対する意見・要望を聞くことを通しても FD と人材育成に反映させようとしている。その結果を踏まえて平成 20 年度もコミュニケーション能力の低下や自然体験の不足を補完するものとして、教員が学生と共に参加した野外教育研修や tap 研修などのプログラムを教育計画に組み込み実行した。また、コスモス祭を表現力・創造力・実行力・伝達力などの育成を図る教育機会として捉え、学部全体で組織的に取り組み、教員と学生が共に育つ「共育」の成果として現れるように FD 活動を実践した。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

学生による授業評価はリフレクションシートとして春、秋セメスター終了時に実施し、講義内容や教授方法の改善点はどのようなところにあるのかを調査した。今年度も授業評価の結果を学部長への教育活動報告書に記載してもらった。今後は授業評価の結果を教員と学生が共有出来るようにしたい。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

教員相互の授業参観については、あえて特定の時間を設けず、いつでも授業の参観ができるような体制をとっているが、教員それぞれの持ち授業時数が多いためか、あまり相互参観が進んではいない。しかし、今年度もゼミ論発表会では、複数のゼミが公開発表を行い 2 年間のゼミ内容の集大成を見てもらった。

④ 研修活動の組織的な取り組み

- ・ 平成 17 年度から開始された一年次教育に関する研修を主な題材にして、答申「我が国の高等教育の将来像」を踏まえ、基礎力の充実を図るために求められる教

員の資質と能力の向上を目指して1年次、2年次の担任が中心となって今年も学内で1日ではあるが研修を行った。このことは教育学部の独自性を発揮すべく内容を再構成し、昨年まで2年次の「担任ゼミ」を無単位で行ってきたが、本年度は必修として単位化し「キャリア演習」として教育効果の充実に向けて取り組んだ。

- ・ 教員の資質と能力が、教職に対する愛着、誇りに支えられた知識、技能等の総体であることを、学部長をはじめFD委員が中心となり各種の会議等で発言し、FD活動基盤の意識化を進めた。
- ・ 他大学におけるFDフォーラムに参加しFD活動の内容と実態を把握し、本学部の将来構想や各教員の資質と能力の向上を図るようにしている。

⑤ その他の取り組み

平成17年度、平成18年度に採択を受けた教員養成GP「実践的指導力を育てる体験学習プロジェクトー地域連携プログラムの検証と研究ー」の推進過程は、学部のFD活動にも大きな寄与があった。教員養成に係る学部教員にとって、当GPの各プログラムの遂行・省察の過程は、学部全体の方向に照らして各教員の教授行動を振り返り、改善を求める過程であった。「教員としての資質能力に関する調査」「各種体験学習プログラム」「教材・教授法開発プログラム」「宿泊集団生活体験プログラム」「シンポジウム」等への参画は、そのまま学部教員のあり方を強く示唆するものであった。

その意味においてFD活動にも、学部の独自性なり性格に基づいてのFDのあり方を考えさせる契機でもあったといえる。また、日常的な教育活動と密着してのFDのあり方を考えさせるものでもあった。これらの点、今後、より充実したFD活動に向けていきたいと考える。

(4) 今後の予定や課題

本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える学部の形成を進めるために一層のFD活動を推進する。具体的には、講義科目の授業評価アンケートだけではなく演習、実習、実技科目についてのアンケート用紙を作成し実施すること、そして、アンケート結果を集計し学部内そして学生への還元が課題でもある。

§ 芸術学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ・ 芸術学部のミッション「芸術による社会貢献」の意図を理解するとともにそれを実践する人材育成が学部全教員の目標であることを認識し、その達成のための方途を探究する。
- ・ 三学科それぞれの特性を反映した独自のカリキュラムに加え、学科相互間の学習連携の実現を強く意識したカリキュラムをも合わせて設定することで「社会貢献」に対する幅広く有意義な体験の機会を持たせる。
- ・ 「芸術による社会貢献」達成のための具体策として多様な職業の理解と就職することへの意識向上を図る。そのためにキャリアセンターとの連携を密にし、各種就職説明会および試験等の企画と実施に各学年の全担任が協力する。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

芸術学部長を中心に主任会メンバーがこれに当たる。毎月の主任会と主任研修会で活動目標とその達成手段を検討し、随時その成果及び新たな方策等を拡大教授会で報告する。

(3) 平成 20 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況・成果）

- ・ 芸術学部では各セメスター終了時に、成績報告と各学科学年の GPA グラフを保護者に送付している。これにより学生及び保護者に、学生の就学状況の認識を促している。
- ・ 成績不振学生に対しては、次セメスター履修登録前に、芸術学部独自のスケジュールによる履修継続特別指導を行い、また指導記録を作成している。この業務により、成績不振の学生の継続的な指導が、可能になっている。
- ・ 通常授業とは別に、芸術学部の学生としての基礎的学力・知識向上を図るために、芸術教養テストを春セメスター1・3年次生に「アート・スタンダード・テスト」として3年間実施した。成績は予想以上に良好であり、学生の関心を広げる効果があったと看做せる。今年度はあらたに、テキストとして用語集を出版するべく担当教員グループを設けてキーワードの選出、解説文作成の作業を進めてきたが、進捗がやや遅れ、出版を次年度の課題とする。
- ・ 学生の言語スキル育成の一環として、メディア・アーツ学科において外国人専任担当による、主に音楽分野を対象とした「アート・イン・イングリッシュ」を開講し、3年が経過した。今後はコア科目の言語関連科目との連関性、及び芸術諸分野を統合した授業内容を考察する必要がある。
- ・ 卒業プロジェクトを中心に、優秀な成果を修めた学生に授与する芸術学部長賞を創設した。本年度はその第4回にあたるが、評価を形にすることにより、教員及び学生のモチベーションを高めることができたと考えられる。
- ・ 教科書編纂事業を各学科において検討中であったが、まずパフォーミング・アー

ツ学科では鍵盤楽器（ピアノ編）分が仕上げの段階にはいった（来年度は管楽器分を出版予定）。またビジュアル・アーツ学科では1年次必修科目「平面造形基礎」と「立体・空間造形基礎」のテキストが完成した。メディア・アーツ学科では次年度中にメディア・アーツに関する包括的な教科書を出版予定である。

- ・音楽系では特にピアノ等の実技レベルに応じた履修クラス分けを徹底した。演劇・舞踊系では科目「パフォーマンス」に繋がる表現領域・企画等の科目内容を充実した。ビジュアル・アーツ学科は実技を演習科目とし、メディア・アーツ学科との連携を打ち出した。これらにより、学生の多様化するニーズに徐々に対応してきていると考えられる。
- ・ビジュアル・アーツ学科とメディア・アーツ学科では、今年度、VAの中心的科目であるエキシビジョン（ファッションショー）において、協同授業を行った。来年度はより本格的な協同授業の取り組みを行い、授業効果を上げると同時に、両学科の学生のニーズに応えていく。
- ・就職指導への取り組みとして、学生のSPI試験、VPI試験、R-CAP試験を継続する。

② 学生による授業評価（活用状況・公表）

平成18年度から芸術学部として授業評価アンケートの回答用紙を作成し、芸術学部開講科目（受講者30名以上の講義科目）を対象に補講・試験期間内で実施してきたが、平成20年度も同様に継続した。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

三学科共に産学連携プログラムにおいて、校内教員のみならず学外者による授業参観を実施した。尚、連携先としてパフォーミング・アーツ学科<青山円形劇場>、メディア・アーツ学科<デジタルプラネット Music Japan TV>及び<相模原・町田大学地域コンソーシアム>、ビジュアル・アーツ学科<町田市立博物館>などがあり、社会の文化施設との連携の中で行われているといえる。これらの連携授業は、学内からも複数教員の協同によって成立するものであり、教員相互による授業参観は必然的となっている。

また上記したファッションショーでは、今年度実績の学習効果をより向上させるために両学科を連携による教員相互の授業参観も、本格化する。

④ 研修活動の組織的な取り組み

一年次セミナーの授業時間の有効活用と、内容理解充実のために芸術学部独自の方式を継続的に模索中であり、実験的授業を新入生研修で実施した。この成果のデータ化には時間を要するが、学部内担当教員による授業内容改善の話し合いが行われており、今後も継続する。

⑤ その他の取り組み

- ・eエデュケーションの促進

メディア教育推進室の協力を得て、授業におけるBlackboard活用を促進しつつある。「エキシビジョン」「メディアプロジェクト」などの学科を横断する授業において、その活用を計画している。また、拡大教授会において3回にわたりBlackboard活用の研修会を設けた。

- ・ 教員の業績報告・研究者情報総覧記入の徹底と研究内容の明確化を促進する。これは教員個人の業績をあげるばかりか授業改善にも繋がり、その研究成果を学生へ還元することを重要目的としている。

(4) 今後の予定や課題

- ・ GPA 向上、附加能力向上とともに、社会貢献の機会と場の獲得のための重要課題の一つである就職と、どのように取り組むかを教員、学生双方に認識させていく方途を考えなければならない。特に今の社会情勢から想して3年次早期からのプログラムを検討する必要がある。
- ・ 様々な試みの継続と発展を心掛けていく必要があるが、その整理も必要と考えられる。例えば難しい面があるが、教員の業務の偏りをできるだけ減らし、各教員のモチベーションの向上を図る必要もあろう。
- ・ 芸術学部のカリキュラムの改編を検討する時期に来ている。メディア・アーツ学科の完成年度でもあることから、これまでの反省に基づき、学士力向上を目指す授業のあり方を各学科とも連携を確認しながら進めることになる。

§ リベラルアーツ学部

昨年度、文学部リベラルアーツ学科を発展させた形でリベラルアーツ学部リベラルアーツ学科が発足したことに伴い、FD活動は両学科で共通して行われた。

(1) FD活動への取り組み理念・目標

近年、大学を取り巻く環境が大きく変化し、さまざまな形で大学改革が進められる中において、本年度より大学設置基準でFDが義務化され、大学教育の質保証のためにFD活動は重要課題になっているが、本学部においては、文学部リベラルアーツ学科開設時よりFD活動に積極的に取り組んでいる。学部・学科設置の趣旨と教育目標、ならびにリベラルアーツ教育の理念をいかに実現するかという視点から、日頃の教育研究活動の改善へ向けたFD活動を展開するように心がけている。

(2) 学部におけるFD活動の組織体制

学部長、学科主任等各主任、FD委員を中心に、所属教員全員が主体的にFD活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

(3) 平成20年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況・成果）

FD研修会の開催、学生による授業評価の実施、教員相互の授業参観への取り組み、学外研修への参加などの活動で、概ね成果をあげることができた。

② 学生による授業評価（活用状況・公表）

各教員がそれぞれの授業形態に応じて、授業に対する学生のリアクションや評価を確認しながら、授業運営の改善に努めた。授業アンケートは、1年次必修科目を中心に実施し、学生にフィードバックするとともに、結果を授業運営に反映させた。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

本学部においては、学際的アプローチを研究と教育の特色にしており、専門分野の異なる複数の教員が協働して担当する授業科目や教育活動が多くあり、必然的に教員相互の授業参観の機会が伴っている。それらの科目を中心に、教授方法や指導・評価方法について教員相互に客観的把握と意見交換を行い、改善に努めた。

④ 研修活動の組織的な取り組み

教育研究活動の改善へ向けて、日頃から学部全体で取り組んだが、本学部に特徴的なFD活動として、年度末（2月16日）に、学外施設において集中的に、ほぼ全員の教員が参加してFD研修会を実施した。

この研修会では、(ア)まず、読売新聞東京本社編集局教育取材班記者の松本美奈氏の講演「取材を通して考える今日の大学教育」を行った。講演内容は、平成20年に実施された読売新聞全国調査「大学の實力：教育力向上への取り組み」の

結果を踏まえたものであった。(イ)次に、ワークショップを実施し、①中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」を踏まえたリベラルアーツ学部における「学士力」、②学部完成年度以後の新カリキュラムの課題と方向性、③来年度1年生研修の計画と運営など、についてそれぞれ検討した。この研修会の開催は、日頃の教育活動の点検調査を行い、今後の教育活動を推進していく上で極めて意義深かった。

⑤ その他の取組み

プレゼンテーション研修会には本学部から3名が参加し、プレゼンテーションスキルの向上に努めた。

大学セミナーハウス主催「第49回大学教員セミナー：学士力を考える」(9月22～23日開催)、及び「第50回大学教員セミナー：徹底討論—学士力を考える」(3月2～3日)にそれぞれ1名が参加した。

大学セミナーハウス主催特別講演「大学改革の現状と課題」(講師：文部科学省高等教育局長)(11月15日開催)を1名が聴講した。

京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第15回大学教育研究フォーラム」(3月20～21日開催)に1名が参加した。

これらの外部機関が主催するセミナーへの参加から、大学教育やFD活動に関する貴重な情報が得られた。

(4) 今後の予定や課題

- ①これまでと同様、FDへの意識をより高めるとともに、インターアクティブな相互研修を基盤とするFD活動の機会を多く設け、本学部教員の「教育力」と資質向上を一層図っていきたい。
- ②学部運営の「PDCAサイクル」の中にFD活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に活かしていく仕組みを構築していく必要がある。
- ③中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」を踏まえ、リベラルアーツ学部における「学士力」とは何かについて検討し、それを本学部完成年度(2010年度)以降の新カリキュラム作成に反映させることが今後の課題となる。

Ⅱ 教員研修

1. プレゼンテーション研修会

(1) 実施の概要

平成14年から17年までは年に5回実施し、それ以降は年に3回の実施を継続している。今年も、夏休みに2回、春休みに1回、合計3回実施し、本年の参加数は20名であった(途中欠席の2名は除外)。平成14年の第1回からの延べ人数は、223名(うち在職者は204名)となり、専任教員の8割以上が受講済みとなった。新任教員や希望者を中心に、今後にも年に3回程度の研修会を続行し、教員の基礎体力ともいえるプレゼンテーション力を、維持管理していく必要がある。

3回のクラスすべてにおいて、積極的で効果的な運営が行われた。プレゼンテーション技法の向上だけでなく、教員間のコミュニケーションを図る上でも非常に効果的であった。特にFD活動は「協同作業」で行うものであることを考えると、ここで培われた教員同士のつながりは貴重なものである。この教員間の輪を大切にしていくことが、さらに幅広いFD活動へと発展するための鍵となり、最終的には学生への教育の質を高めることに役立つと確信するものである。

(2) 研修プログラム内容

2日間、朝9時から17時までの日程で、以下に示すように演習が中心である。特記すべきことは、ビデオを使った演習方法と、他の参加者による評価である。ビデオで客観的に教壇での自分の姿を観察することや、同僚である教員を前に模擬授業を行い、評価されるということは、大学という場ではなかなか経験できないことであり、それだけ成果も大きい。

第1日目	第2日目
第1章：プレゼンテーションの基本 第2章：視聴覚教材の使い方	第3章：質疑応答の技法 演習3：基本的な技法の演習 演習4：ディスカッション
演習1：模擬授業 プレゼンテーション(1) 演習2：改善点の明確化 ビデオ視聴による改善作業	演習5：模擬授業 プレゼンテーション(2) 第4章：まとめ 演習6：アクション・プラン作成

(3) 実施の状況

開催の日程および参加人数は以下のとおりである。開催場所は、全クラスとも研究管理棟 201・202 会議室である。参加者詳細は (8) 「参加者一覧」 参照のこと。

- ・第1回： 8月05日(水)～8月06日(木) 7名
- ・第2回： 9月09日(火)～9月10日(水) 6名
- ・第3回： 2月12日(水)～2月13日(木) 7名(1日目9名、2日目7名)

(4) 実施後のアンケートから

アンケート項目は、継続的に変化を捉えるために、1年目から同じにしている。項目ごとにA～Eまでチェックするものとフリーコメントの両方からなる。

(4) - 1 チェック項目の集計結果

以下は、チェック項目の結果である。「#」はクラス番号で、その列の第4行、「計」(網掛け行)は3クラス分の合計である。「点」はA=5、B=4、C=3、D=2、E=1として平均を出したものである。合計人数には無回答を含めていないので、項目によって人数が異なる。

参考のため平成14年から平成19年までの平均も下段に載せた。1年目は多少低いが、2年目以降、ほとんど数字の変化はない。「スキルは向上したか？」の項目だけ3.8と低いポイントである。これは、自分自身に対しての厳しい評価を反映しているものであり、当該研修を通じて「プレゼンテーションのスキル」の重要性を理解し、自己のスキルに注目するきっかけになったと解釈することができる。

① 全体について

総合満足度								授業に役立つか								スキルは向上したか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	2	0	0	0	7	4.7	1	5	2	0	0	0	7	4.7	1	0	6	1	0	0	7	3.9
2	4	2	0	0	0	6	4.7	2	4	0	1	0	0	5	3.8	2	0	4	1	0	0	5	3.2
3	7	0	0	0	0	7	5.0	3	6	1	0	0	0	7	4.9	3	3	3	1	0	0	7	4.3
計	16	4	0	0	0	20	4.8	計	14	3	1	0	0	19	4.5	計	3	13	3	0	0	19	3.8
19年	20	3	0	0	0	23	4.9	19年	20	2	1	0	0	23	4.8	19年	10	11	2	0	0	23	4.3
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	12	4	0	0	0	16	4.8	18年	3	11	2	0	0	16	4.1
17年	28	5	1	0	0	34	4.8	17年	27	7	0	0	0	34	4.8	17年	12	16	5	0	0	33	4.2
16年	29	3	1	0	0	33	4.8	16年	28	4	1	0	0	37	4.8	16年	10	21	3	0	0	33	4.2
15年	34	3	1	0	0	38	4.9	15年	32	4	1	0	0	37	4.8	15年	12	22	2	1	0	37	4.2
14年	41	15	2	1	0	59	4.6	14年	43	14	2	0	0	59	4.7	14年	10	38	6	4	0	58	3.9

② 研修会の質について

講習内容								講師								テキスト、教材、教具							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	3	3	1	0	0	7	4.3	1	7	0	0	0	0	7	5.0	1	4	3	0	0	0	7	4.6
2	4	2	0	0	0	6	4.7	2	6	0	0	0	0	6	5.0	2	6	0	0	0	0	6	5.0
3	5	2	0	0	0	7	4.7	3	7	0	0	0	0	7	5.0	3	5	1	0	0	0	6	4.1
計	12	7	1	0	0	20	4.6	計	21	2	0	0	0	20	5.0	計	19	4	0	0	0	19	4.6
19年	14	9	0	0	0	23	4.6	19年	21	2	0	0	0	23	4.9	19年	19	4	0	0	0	23	4.8
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	15	1	0	0	0	16	4.9	18年	14	2	0	0	0	16	4.9
17年	21	12	0	0	0	33	4.6	17年	33	1	0	0	0	34	5.0	17年	29	4	1	0	0	34	4.8
16年	27	6	0	0	0	33	4.8	16年	32	1	0	0	0	33	5.0	16年	29	4	0	0	0	33	4.7
15年	26	10	1	1	0	38	4.6	15年	35	3	0	0	0	38	4.9	15年	31	5	1	0	0	37	4.8
14年	36	17	3	2	0	58	4.5	14年	51	6	1	0	0	58	4.9	14年	40	17	2	0	0	59	4.6

③ 研修会の運営について

日程								時間配分							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1	1	0	0	7	4.6	1	3	4	0	0	0	7	4.4
2	4	1	0	0	0	5	4.0	2	1	5	0	0	0	6	4.2
3	4	2	0	0	0	6	4.7	3	4	2	0	0	0	6	4.7
計	13	4	1	0	0	18	4.4	計	17	6	0	0	0	19	4.4
19年	9	13	0	0	0	22	4.4	19年	17	6	0	0	0	23	4.7
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	11	5	0	0	0	16	4.7
17年	20	10	10	0	1	32	4.5	17年	26	6	1	0	1	34	4.6
16年	24	8	1	0	0	33	4.7	16年	26	6	1	0	0	33	4.8
15年	24	9	5	0	0	38	4.5	15年	31	6	1	0	0	38	4.8
14年	28	19	3	5	3	58	4.1	14年	40	16	2	1	0	59	4.6

開催場所								事務処理・連絡							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	0	2	0	0	7	4.4	1	6	1	0	0	0	7	4.9
2	4	2	0	0	0	6	4.7	2	5	1	0	0	0	6	4.8
3	5	2	0	0	0	7	4.7	3	4	2	1	0	0	7	4.4
計	14	4	2	0	0	20	4.6	計	19	3	2	0	0	20	4.7
19年	17	5	1	0	0	23	4.7	19年	19	3	2	0	0	24	4.7
18年	10	5	1	0	0	16	4.6	18年	8	7	1	0	0	16	4.4
17年	29	5	0	0	0	34	4.9	17年	19	9	3	1	1	33	4.3
16年	24	7	1	0	0	32	4.7	16年	22	9	2	0	0	33	4.6
15年	22	12	2	1	0	37	4.5	15年	16	16	1	2	1	36	4.2
14年	17	24	6	6	0	59	3.6	14年	14	20	15	7	2	58	3.6

④ 研修会の開催について

研修を継続すべきか								他の人に参加を勧めるか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1	1	0	0	7	4.6	1	4	3	0	0	0	7	4.5
2	3	2	0	0	0	5	4.0	2	3	2	0	0	0	5	4.8
3	6	1	0	0	0	7	4.9	3	5	2	0	0	0	7	5.0
計	14	4	1	0	0	20	4.5	計	12	7	0	0	0	19	4.4
19年	18	2	2	0	0	22	4.7	19年	18	3	1	0	0	22	4.8
18年	14	1	1	0	0	16	4.8	18年	12	4	0	0	0	16	4.8
17年	23	6	2	0	1	32	4.6	17年	23	7	2	0	0	32	4.7
16年	27	5	1	0	0	33	4.8	16年	29	4	0	0	0	33	4.9
15年	33	4	0	1	0	38	4.8	15年	34	2	1	0	0	37	4.9
14年	46	9	2	2	0	59	4.7	14年	41	14	2	2	0	59	4.6

(4) - 2 フリーコメント概要

項目別の数字によるポイントはすでに安定しており、改善項目を洗い出すという点では無意味である。こうした場合、ますますフリーコメントの重要性が増すことになる。20名のほとんど全員がコメントを書いており、総数は69件あった。記述的に書かれたコメントを集計することは、大変労力を要するが、この中には多くのメッセージが含まれているので、今後も集計をしていきたい。

ここでは、コメントをカテゴリー別に分け、数の多いものや注目すべきものを中心に、私見を含めて記述する。

■「有用性」についてのコメントは25件あった。その多くは、「改善点がわかった」「改善の重要性に気づいた」「授業方法を再確認できた」など、「気づき」に関するものである。これは、ビデオで自己を客観的に見たことが大いに関係すると思われる。教育現場では、改善の必要性を感じながらも切羽詰ったものとして捉えていないことが多い。当該研修会が刺激となり、FDに関する意識の向上に効果があったのではないかと思う。

また、「3色カードが役立つ」などのように、具体的に授業に使えるヒントを得たというコメントもあり、当該研修会が授業改善に有意義であることを感じた。

■「内容」では、現在のカリキュラムについては、ほぼ満足していただいているようである。昨年までなかったコメントとして、「講義部分をBlackboardで学びたい」「詳細なテキストがほしい」など、講義と演習を分けることを希望する意見が出てきた。当該研修の今後の運営の参考意見になると思う。

また、昨年同様、「ディスカッション」には、参加者教員以外のメンバー（FD委員や職員）の参加を求めるコメントもあった。

■「日程」については、昨年同様、「2日間」については了解されているようである。また、「終了時間を早くしてほしい」「1日ずつ2回に分けての開催を希望する」というような、開催形態についての提案があった。「1日ずつ2回に分ける」という意見は過去にも出ているが、1回目と同じ受講者が必ず2回目にも集まるという保証がないため、現実には問題がある。終了時間については、演習時間が参加者人数に比例するため「4時終了」と確約することはできない。8名程度であれば、早めに終了することが可能であるので、運営でカバーしていく方法を取り、今後もプログラムとしては「5時終了」と記載しておく。

■「参加形態」に関して、「必須である」「義務である」といった当該研修の必要性を述べたコメントの他、「若手に必要」「新人に必要」「年配こそ必要」など、具体的に書いてあるコメントも例年に比べて多かった。

■「希望する研修」の種類は多岐に亘っている。「交流を目的にした研修」「PowerPointなどの技術習得を目的とした研修」「FDに関する研修」「グループ討議やディベートなどの教育技法の研修」など18件もあった。参加者が20名であることを考えると、多くの教員が何らかの研修会への参加を希望していることがわかる。ただ、現実にはFD委員会や研修センターが運営するには、費用や参加者数など問題が多く、すぐに実現することはできない。しかし、FD活動の一環として、研修のメニューを増やしていくことは必要だと感じている。

■「その他」として、「プレゼンテーション研修会の次ステップを考える必要がある」、「本当の授業をビデオ撮影して自己評価する仕組みがほしい」「事務職員も含めたFD研修会が必要である」といった、FD活動に関する積極的な意見も多くあった。こうした積極的意見を取り上げて、FD活動を発展させていくことが大切だと痛感した。

(5) ディスカッションの実施

2日目午前中のディスカッションは、FD活動の基盤となるコミュニケーションを円滑にする重要な役割を担っている。参加者にも好評で、全員で熱く語り合うことができた。参加者のコメントからも、もっと時間をとって本音で話し合い、その意見を集約して、さらなる改善に結びつけていくことが、次のステップとして必要だと感じる。

これだけ大規模な大学の中で、学部・学科という壁を越えて本音でフリーディスカッションをすることは、大変価値があることである。コミュニケーションが円滑になるという効果だけでなく、FDに関する共通理解を得たことが、より重要である。FD活動について共感しあって築いた人間関係が、これからのFD活動を学部・学科を越えて広げていくための原動力となると感じている。

ディスカッションでは、FD活動関連だけでなく、組織的なことや施設のことなど多岐にわたる意見交換が行われた。いずれにしても、“より質の高い教育をしたい”、“玉川大学の価値を高めたい”、“学生に満足してほしい”という熱意に溢れている意見ばかりである。教員一人ひとりの熱い思いが感じられた時間であったと思う。これらの意見は、積極的かつ建設的なものばかりであり、今後のFD活動の幅を広げるための参考になると考えられる。昨年あたりから、「FD委員も含めて実施したい」「事務職員も含めて実施したい」というコメントも増えてきた。是非、FD委員会ですべての意見を検証して、実施可能なことは実施の方向に進めていきたいと思う。

本年度は、単に意見を出しっぱなしにせず、それに対する改善策まで議論が及んだことが特徴として挙げられる。ディスカッションの内容がより深くなったと考えられる。また、玉川大学としての方針、全人教育やFYEに関する積極的意見が多く、より具体的な提案が出されたことも特記に値する。

また昨年度あたりから、参加者のうち新任教員の割合が多くなったため、成績評価の仕方など、実務での悩みなども表面化してきた。これらも含めて、FD活動に取り入れることができると思う。

ここでは、ディスカッションで出た意見を、クラス別に列挙する。3クラス分を統合せずにクラス別にするのは、フリー・ディスカッションの形式にしたため、出てきたテーマがクラス別に異なるからである。また、なるべく生の声が聞えるように、抜粋したりまとめたりしないで、単に内容別に分類するだけにとどめて記述する。なお、掲載にあたっては、参加者全員にコピーを送付し、事前承諾をいただいている。

第1回(8/5~6)(名簿順、敬称略)

メンバー：三馬志伸、肥塚信也、大森隆司、菅野直敏、伊藤良二、
小倉康之、今江夏彦 (計7名)

★FD活動について

- 効果的なFD活動をすることが大切である
- バラバラに活動していても、効果はあがらない
- FD活動については、今までも十分議論されている
- FDが必要なのは明白なので、活動の仕方を議論すべき
- 改善するためのルートが見えないことが問題である

★授業運営のヒント

騒がしい学生への対応

- 怒鳴ると、学生は驚き静かになり、効果はある
- 怒鳴ることも必要である
- 確かに怒鳴ると効果があるが、自分にも返ってくる(自分の精神状況によくない)
- 小テストを毎回するようにしたら、全体に静かになった
- 教員がしばらく沈黙して時間を取ると、静かになる(怒鳴るよりも効果がある)
- 人によって、方法はさまざまである(怒鳴るのが不得意な人もいる)

多人数の授業の場合のヒント

- 多人数だと、騒ぎ易いし理解度も低いので工夫が必要である
- 多人数の場合は、座席表を作るとよい → 出席確認、問題学生の把握などができる

理解度把握のためのヒント

- 授業中に巡回することによって理解度を把握できる
- 小テストをすると効果がある

★学生によるアンケートについて

記名式にしたらい

- 記名式にすると、責任ある意見が出てくるので効果的である
- 記名式だと成績評価につながるのでは？という学生の不安をよぶ
- 実際に、悪い評価の学生が不利になった例も報告されている
- 収集方法、報告方法、個人情報保護など、きちんとした仕組みが必要である
- カテゴリー別に集計するほうが改善に結びつく
- カテゴリーによって分けて集計すべきである
- 学生の人数によって分類すべきである(少人数では良い評価を得やすい)
- 授業内容や形態によって異なる
- 必須科目と選択科目では、学生の意欲に差があるので結果にも差がでる
- 同じ教員が担当している専門科目と基礎科目とを比較すると、質がよくわかる

学生の意見の有用性

- どの程度まで評価結果や意見を信用するのか？
- 成績の上位者のみの意見を反映したい（成績優秀者の方が適切な評価をする傾向）
- 評価されたくない学生もいる → 評価する資格のない受講態度の学生など
- 授業が理解できないことを、自助努力なしに教員に責任を押し付ける場合もある
- したがって理解度をあげようとする、授業のレベルを下げる結果になってしまう
- どのように改善に結びつけるかを明確にしないと、学生にとっても無意味である

アンケートを授業改善に結びつけるには？

- 学期末にアンケートをとっても、フィードバックできない
- 独自に授業中にアンケートを取って、学期内に反映している（自分で実施）
- 授業改善に役立つ情報を共有できる場が必要である
- アンケートを取りっぱなしではいけない

★授業の質について

人数について

- 少人数といているが、実質はそうではない
- 何人を「少人数」といえるのか不明
- 人数が多いと、質が下がるのはいたし方ない

就職活動との兼ね合い

- 4年生は就職活動のために授業にならない
- 農学部では、4年生は卒業研究と演習のみを取るように指導している
- 単位を早めに取りさせるようにするとよい

★シラバスについて

シラバスについての議論

- 前年にシラバスを記入するので、その時期に変更できないのは困る（特に秋学期）
- 4年間の契約であるから、前に作成したものを活用すべきである
- そうではない、シラバスは1年間の授業計画である → 毎年更新可
- 講義概要が4年間の契約であってシラバスではない

シラバスの融通性について

- 学期内に一度見直しできる機会がほしい
- 途中変更の希望はあるが、それができない理由があるらしい（授業運営課の問題？）
- 現実には、学生の理解度によって変更せざるをえない
- 目標や内容を大幅変更は許されない
- 実施面での微調整は可能である
- 微調整のシラバスを初日に配布するのは有効
- 空白の1コマを設けることによって調整できる
- 空欄になっているとダメだが「調整日」は記入可

シラバスの有用性

- シラバスを見ていない学生が多い → 意味ないのではないかな？
- 教員側の計画には役立つ
- 履修登録には有効である

★大学の目標や強みについて

大学の目標や方針について

- 目標が明確になっていない（示されていない）
- 玉川大学のあるべき姿（目指す方向）が不明瞭である
- 方針が見えないために、どうすればよいのか不明瞭になる
- 玉川らしい教育とは何か？
 - やはり「全人教育」であるべき
 - 全人教育が曖昧になってきている

全人教育について

- 小原イズムを基本としてアピールしたほうがよいと思う
- 最近、小原イズムを払拭しようとする風潮がある
- 小原イズムをなくして他大学と同じ土俵で勝負するのは不利である
- リベラルでは、昔の全人教育復活の方向にある
- 昔の全人教育に戻すと、教員の「新入生への指導」への熱意が出てくるようである
- 農学部の場合、他大学の農学部と同じことをしていても勝てない
- 玉川のよさの「小規模」をアピールしたほうがよい（農学部）
- 全人教育がなくなったため、担任同士が会う機会がなくなった（2年生）

F Y Eについて

- 全人教育の代わりにF Y Eがある（ひとつの強み）
- F Y Eの効果や有用性について疑問がある
- 担当する先生方が苦勞されている

F Y Eの評価基準について

- 1年次セミナーの成績をつける判断基準が不明瞭である
- 「F」をつける勇気がでない
- 再履修の負担が大きすぎる（学生にとって）
- 工学部は簡単なテストをして、礼拝労作担当が採点する
- 学科や学部によって成績のつけ方が異なるのは不公平である

★学生の質について

- 学生のレベルが低い（精神レベル）ようである
- 今年入学の学生は特に低い（ゆとり教育の弊害？）
- 学生の自覚がない（中学生程度） → F Y Eで十分かな？

★教員の仕事について

「教育」と「研究」の兼ね合いについての議論

- 最近「教育」と言っているが、本当にそれでよいのか？
- 今までの「研究」優先だったが、軸足を「教育」にも移そうということでは？
- 大学教員は、当然「研究」に軸足を置くべきである
- 大学に「教育」だけの教員が存在するの？ → No！
- 「教育だけ」といっても、そこには「研究」が入るはずである
- 実際は「教育」については評価されないのだから、「研究」が必要である
- 「教育」の評価基準は不明確

担任の仕事について

- 担任が機能している学部は、奉仕活動になってしまう
- 担任の仕事をきちんとすると、大変な労力である
- 結局、担任がするのは、問題学生への対処のみになってしまう

★成績評価について

成績表の提出について

- 期末テスト後4日で成績を出すのは無理がある（補助要員が必要）
- 授業運営課の事務運営の関係で4日は必須になってしまう
- 1週間後でも問題ないのではない？
- 理由を明確にしてほしい
- 論文などのテストの場合は時間がかかるのは当然である
- 文章を書かせた場合の採点には時間がかかる

評価基準について

- ある程度、AやFの基準を示して欲しい
- 「自由に」と言われても、Fが多すぎると説明責任があり面倒になる

その他

- 期末テストではなく期間中にテストをするとよい（欠席者などへの配慮）
- 成績ファイルを安全な場所（サーバー上）がほしい

★授業の回数について

- 15回を遵守する必要があるのか？（遵守していない大学もある）
- 文科省の指導だから、遵守すべきである
- 遵守するためには、仕組みも変更しなければ無理がある
- 15回を遵守するのはよいことだが、そのために採点期間が短縮するのは困る
- 春学期末（夏）は学生にとっても負担が大きい（7月の終わりまで授業がある）

第2回(9/09~10)(名簿順、敬称略)

メンバー：干場英弘、吉川朋子、山口圭介、法月敏彦、
Barry Mateer、山下千里 (計6名)

★学生の質が落ちていることについて

言語に関する例

- 言葉遣いが気になる(例：脈略なく突然「なので」で始める)
- 提出する文章にも、学生言葉が出てくる → 使い分けができない
- eメールに差出人を書かない学生がいる → 携帯メールに慣れているため
- 実力があるのに、言葉遣いが原因で評価が悪くなってしまうことがある
 - 場面によって言葉を使い分けるだけの教養が必要である
 - 使い分ける訓練が必要である(国語の教科はあるが、話し方の教科はない)
 - 所属グループ(地域社会など)が限られているために言葉が訓練されていない
 - 部活もしない学生が多くなっている → コミュニケーション不足
 - 授業の中で、「なぜ大切なのか」を説明し、訓練する必要がある
 - 就職活動に結びつけると(例：グループ面接)、話し方を指導しやすい

受講態度に関する例

- 教師が話し始めてもザワザワとして話をやめない
- 海外での授業では、教師が話しを始めるときには静粛になる(訓練されている)
- 日本においても、外国人の教師が話し始めるときには静粛になる
- 大学で授業を受けることの「目標と目的」を明確に説明する → F Y E ?
- 学生にも理由を説明させる必要がある(例：遅刻)

コミュニケーションに関する例

- コミュニケーションを取るのが下手な学生が増えている
- 学生が自分独自に(教員に聞かずに)間違った判断をすることがある(欠席状況を教員に聞くことなくダメと諦めて単位を落とすなど)
- 先生に相談できない(必要性に気づいていない)学生が増えている
- 授業中にディスカッションさせようとしても、ディスカッションできない
- 話し合いではなく、先生との1対1の会話になってしまう
- 学生同士で、反対意見を述べ合うことができない
- ディスカッション・スキルを養成する機会を増やすことで、改善できるのでは?
- F Y Eで、コミュニケーションを教育する必要がある
- F Y Eではなく、L D (Learner Development)が必要である
- L Dは、クラスごとに約束事(例：評価など)を明確にすることで、養える

あいさつができない学生の例

- 「あいさつ」をしない学生が増えた
- 「あいさつ」しないことが、コミュニケーション不足の原因である
- こちらがあいさつしても返さない学生がいる

- 「あいさつ」の習慣がある地域では情報の伝達がよい(コミュニケーションの基本)
 - 欠落した日本文化：あどうち(=あいづち)→返事を返さなくなってきた
 - キャンパスという地域社会のコミュニケーションが崩壊している

★成績評価について

F評価をつけることについて

- 出席率以外でも10%ぐらいはF評価をつける(ある教員)
- 1年生の最初の学期で厳しくしておくと、その後の態度がよくなる
- 1年生から何をしてよいのかのルールをきちんと教育するべきである
- Fを取って再履修した学生が、非常に伸びる場合がある(効果がある)
- 再履修は、本人にとって有効であるはず
- 全入時代だからこそ、厳しくするべきである
- 入学させた以上、厳しく教育するべきである

★大学の状況について

留学生が少ない

- 留学生が増えると、国際的なコミュニケーションが図れるようになる
- 留学生を受け入れると、広い意味での地域社会が広がる
- 留学生を受け入れる体制がない

★ FYEについて

FYEの現状

- FYEは授業として聞いているので、実生活では活用できない
例：「ノートの取り方」を学習しても、他の授業でそれを実践していない
FYEが成績をつける授業なので、実用的になりにくい

FYEの必要性

- 玉川大学という単位での評価(大学の quality)につながる
- 大学基準協会における大学の評価につながる

FYEへの期待

- 基本的な受講態度や人間性について教育し実践させるとよい
- FYEが機能すれば、コミュニケーションの問題は改善される
- 学習したことを実現できるように工夫すれば、活用できるのではないか
- FYEについての認識が、教員間で異なる
- FYE担当者を順次にすれば、全員が内容を知ることができる

FYEの改善案

- FYEをすべて(内容、テキスト、評価、教え方など)統一する必要はない
- FYEの評価はテストではなくプレゼンテーションをさせる(結果がよかった)
- 学科でアレンジし、よければ学部を広げていけば、よりよいものになっていく

第3回 (2/12~13) (名簿順、敬称略)

メンバー：山崎浩一、佐々木寛、菅原昭博、豊田昌史、鈴木康之、
笹川隆司、林三雄 (計7名)

★FD活動について

FD活動の目的

- 現在のFDは、授業改善や学生評価の「実施」が目的になっている
- 本来、学生の「質の変化」を目的としなければならない
- 学生が満足するような大学にすることが目的である
- FDは、大学をよくするエンジンとはなるはずだが、現実には空回りしている
- FDに関して、「大学としての方針」を明確にするべきである
- むしろ方針を不明確にしておくほうが自由がきくのではないか
- FDを「教育者を創る」ことを目標にするとよいのではないか

FD活動実施の現状

- 各個人ではなく、組織的に活動する必要がある
- 組織的に活動するのが、大学ではむずかしい
- 組織で動くための実権が必要である
- 全教員の、FDに関する意識が低い

★授業改善とカリキュラム改善について

- 授業の改善より前に、カリキュラム改善が必要である
- 授業改善が、カリキュラム改善に結びついていない
- 全体のカリキュラム改善をしなければ、本当のFDではない
- 再編成のときにカリキュラム改善の機会になる
- 学科内の教員が同じ方向を向いていないと、カリキュラム改善はできない
- カリキュラム改善の土壌ができあがっていない
- 学科内の教員同士の連携が必要である

★学生によるアンケートについて

フィードバックが必要である

- 評価結果が反映されないので、学生が真面目に記入しないは当然
- 工学部では学科ごとに授業評価をきちんと反映させている
- フィードバックするときには内容に注意する (すべてを受諾するのではない)
- 受諾できること、できないことを明確にし、その理由も明記すると良い
- 授業評価の目的によって、その扱いが異なる
- 授業評価の目的を明確にすることが必要である

評価の方法

- 工学部では全専門科目、授業評価をしている
- 学生が教員を評価する資格はないのでは（というコメントもある）
- 評価する資格のない学生がいることも事実である
- 場合によっては、無視すべき評価もある
- 芸術学部は、人数や科目内容が異なるので、一概に判断できない
- 学生も入れて授業評価の結果を議論するケースもある（学生との関係づくり）

効果について

- 授業評価のポイント自体は、それほど意味がない
- ポイントの点数が重要なのではなく、傾向を知るには有効である
- 評価を意識しすぎて、教授内容のレベルを下げるのは本末転倒
- 評価に一喜一憂するのは、逆効果である

★大学の目標や強みについて

全人教育について

- 全人教育の遺産だけに頼ってはいけない
- 建学の意思の確認が重要ではないか（外部への発信も含める）

玉川のブランド力

- 玉川大学には、ブランド力がある（教育者を創る）
- 「教育の玉川」は、教育者の間では、今も健在である
- 以前は、親戚などからの薦めで入学した学生がいたが、現在は少ない
- ブランド力が低下している
- もっと建学の精神を学生に身につけさせたい（労作が減ってきた）
- 玉川の学生や教職員は、他に比べて素直で奉仕的に思う（それを守るべき）

F Y Eについて

- 目的はよいが、実施するためのインフラが整備されていない（専門家など）
- F Y Eのために教員が増員されないので、特定の教員の負担が大きくなる
- 実技の先生が F Y E を担当するのは困難である
- キャリア教育は専門家に任せるべきではないか

★学生の質について

現在の学生の質

- 粘りのない学生が増加している（社会が豊かになると、そのような学生が増える）
- 「よい子」だが、頼りない
- 素直でよい子の面は、そのまま伸ばすべきである
- 多少、成績が悪くても育てる価値のある学生もいる
- そのためには、今のように成績や出席で機械的に切る方法では無理がある
- 成績は、機械的に切る方法も大切だが、グレイゾーンも残していく必要がある

問題となる学生

- 強い口調で注意するだけで落ち込む学生がいるのでむずかしい
- 精神的に弱い学生もいるので、カウンセラーの利用を考えるべき
- 教員が、どのように指導していけばよいのか自信が持てない
- 問題となる学生に、どう対応するかの方針がない
- 問題ある学生に対して、組織的に取り組む必要がある

★教員の仕事について

- 学科運営に時間を割く教員よりも、個人の業績に目がいく教員が多いのが現実である
- 学科間の教員数のバランスが悪い
- 人事評価に結びついていないので、そのような傾向になる
- 大学という環境では人事評価がむずかしい

★プレゼンテーション研修について

- プレゼンテーション研修は、そろそろ次の段階にはいる時期である
- 新任教員のために研修は続行する必要がある
- 各学部や学科での独自のプレゼンテーション研修が必要である
- なんらかの方法で継続していく必要がある

(6) 実施の成果

プレゼンテーション研修会の実施も7年を経て、大多数の専任教員が受講済みとなり、当該研修会はすでに玉川大学において定着してきた。フリーコメントやディスカッションからも分かるように、当該研修を通じて教員間に相互理解が深まり、FD活動への参画意欲の向上に寄与してきた。この間、改善への提案に結びつくような具体的な意見も多く出てきた。こうした具体的な提案は、大きな進歩と考えることができる。

(7) 今後の課題

当該研修会は着実に成果を上げていると考えることができるが、FD活動全体を考えると、非常に小さい一歩を踏み出したに過ぎない。参加された先生方から、ディスカッションや休み時間の会話を通じて、多くの積極的な提案がなされている。これらの意見から今後の課題として取り上げるべき事柄を洗い出して、ここに記載しておく。

FDは、プレゼンテーション技術の向上が目的ではなく、それによって授業改善が行われ、さらに教育の質向上に役立つことが本来の目的である。そのためには、当該研修会にとどまらず次のステップを考える必要がある。

まずは各学部、学科ごとに、講義内容だけでなく設備や環境を考慮したプレゼンテーション研修会が必要になる。学部によっては公開授業などを頻繁に実施しているようであるが、玉川大学全体として、こうした学部、学科に特化した研修会の実施が期待される。

次に、当該研修会の受講教員に関する事柄である。全員対象として始められた研修会で

あるが、現在は専任教員のみとなっている。学生にとっては常勤も非常勤も関係なく、「先生」である。今後は非常勤講師、特に講義形式が多い学科を担当する人に対しても、研修会を広げていく必要が出てくるのではないかと考える。

こうした活動の展開を考えると、当該研修会の担当者の増加についても検討する時期にきていると感じる。当該研修会は属人的なものではない。特定の担当者しかできない研修会ではなく、誰もが担当できるプログラムにするべきである。誰が担当しようとも、また何年たとうとも必要なプログラムとして継続していくことに価値がある。実際、FD活動が盛んな大学でも、これだけ継続して1つのプログラムを実践している大学は少ない。単発的なイベントに終わるFDではなく、地に足のついた本当に役立つFDの実績を残すためにも、10年、20年とこの研修会を継続する方策を検討することが大切だと感じている。

(8) 平成 20 年度 大学 F D プレゼンテーション研修会参加者一覧

学部	学科	在職者数 (人)	平成 20 年度参加者氏名 (敬称略)			※ 累積数 (人)
			第 1 回	第 2 回	第 3 回	
文	人間学科	13				6
	比較文化学科	20	三馬 志伸			17
	リベラルアーツ学科	3				2
	国際言語文化学科	3				2
農	生物資源学科	14	肥塚 信也			11
	生物環境システム学科	14		干場 英弘 吉川 朋子		10
	生命化学科	19				13
工	機械情報システム学科	21	大森 隆司 菅野 直敏			14
	ソフトウェアサイエンス学科	10			山崎 浩一 佐々木 寛	8
	マネジメントサイエンス学科	12			菅原 昭博 豊田 昌史	6
	機械システム学科	3				2
	知能情報システム学科	5				5
	メディアネットワーク学科	2				2
経	国際経営学科	18	伊藤 良二		鈴木 康之	17
	観光経営学科	11				7
教	教育学科	28		山口 圭介		23
	乳幼児発達学科	9				6
芸	パフォーマンス・アーツ学科	18		法月 敏彦	笹川 隆司	12
	メディア・アーツ学科	12				8
	ビジュアル・アーツ学科	11	小倉 康之		林 三雄	9
リ	リベラルアーツ学科	22	今井 夏彦	Barry Mateer 山下 千里		19
計 (人)		268	7	6	7	199

※在職者数は助手以上で、平成 20 年 5 月 1 日現在の専任教員数。

※累積数は当該学科の平成 20 年 5 月 1 日現在在職者の中で、平成 14～20 年度に研修を受講した専任教員の累積数。

2. 新任教員研修会

平成 21 年度採用の新任教員（助教以上）に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は平成 14 年度より開始されたもので、7 回目の開催となる。参加者 19 名で、2 日間の日程で行われた。

日 時：平成 21 年 2 月 18 日（水）10:00～17:00 、19 日（木）10:00～16:30

場 所：大学 8 号館 123 教室

対 象：平成 21 年度採用の助教以上の新任教員

研修目的：・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・教育方針を理解する

・専任教員としての業務に必要な知識を得る

(1) 研修プログラム内容

【2 月 18 日（水）】玉川大学の組織および概要、教員の業務と授業

時間	内 容	資料 No.	資 料	担 当
10:00	開会／研修説明	—	—	人事部 研修センター
10:10	新任教員自己紹介	—	—	
11:10	休 憩	—	—	—
11:20	・玉川学園の組織機構、 ・玉川大学の概要、 ・専任教員の業務 (各種運営担当、担任業務、教務指導・ 学生指導等)、FD 活動の現状	No.1	・玉川学園組織機構図 ・学部運営組織 ・教職員数 ・学生数一覧	教学部教務課
12:00	昼 食	—	—	—
13:00	キャンパスツアー	別途 配付	・玉川学園案内図	教学部 人事部
14:20	休 憩	—	—	—
14:30	・年間授業計画 ・カリキュラムの概要 ・学則・規程等 (Notes システムと Notes 掲示板の活用、 授業、休講、補講、試験、成績等)	No.2	・始業日程 ・年間授業計画 ・通信教育部 年間授業計画 ・授業運営に関する事項	教学部 授業運営課 e エデュケーショ ンセンター 情報システム室
15:30	休 憩	—	—	—
15:40	本学の I C T を活用した教育 (e エデュケーション) について	No.3		e エデュケーショ ンセンター
16:50	質疑応答／翌日の予定説明	—	—	人事部
17:00	終 了	—	—	—

【2月19日（木）】研究費や事務手続き、服務について

時間	内容	資料 No.	資料	担当
10:00	・研究費と出張（国内外）の手続き他 ・教学事務手続要領について ・個人研究費、学部予算執行について	No.4	・事務手続要領 (P.1～P.50)	教学部学務課
10:30	研究者情報システムについて	別途 配付	—	教学部教務課
10:50	休 憩	—	—	—
11:00	服務について	No.5	・大学教員の服務につい て	人事部人事課
11:40	写真撮影（キャンパス・カード用）	—	—	—
12:00	昼 食	—	—	—
13:00	玉川学園の個人情報保護方針について	No.6	・学校法人玉川学園に おける個人情報保護の 取り組みについて	教育環境コンプライ アンス室
13:30	新教育の開拓者—小原國芳 & 学校紹介ビデオ	No.7	・校歌のうまれたとき	人事部 研修センター
14:30	休 憩	—	—	—
14:40	新任教員懇談会	—	(メモ用紙)	大学FD委員会
16:20	質疑応答・まとめ	—	—	人事部
16:30	終 了	—	—	—

＜その他別途配付資料＞

- ・「図書館利用ガイド（教員用）」（図書館）
- ・「First Year Experience」（コア・FYE教育センター）
- ・「環境問題とISO 14001」（環境部）
- ・個人情報保護マネジメントシステムガイドブック（教育環境コンプライアンス室）
- ・わかりやすい個人情報保護のしくみ（教育環境コンプライアンス室）
- ・「学校における生徒等に関する個人情報の適正な取扱いを確保するために事業者が構すべき措置に関する指針」解説（教育環境コンプライアンス室）
- ・玉川大学研究者情報管理システム ver. 1.1 操作手順書（教員用）（教学部）
- ・教職員のためのセクシャルハラスメント防止等に関するガイドライン

＜参考資料＞

- ・「玉川学園の教育活動・玉川大学の教育活動・玉川大学大学院の教育活動」
- ・全人教育、愛吟集、全人 2009-2月号
- ・CD「歌声は丘に響く」

(2) 実施の成果

今年度の新任教員研修会では、研修内容・資料・講師の説明について、参加者のうち全員が、とても充実していた、あるいは充実していたと回答している。

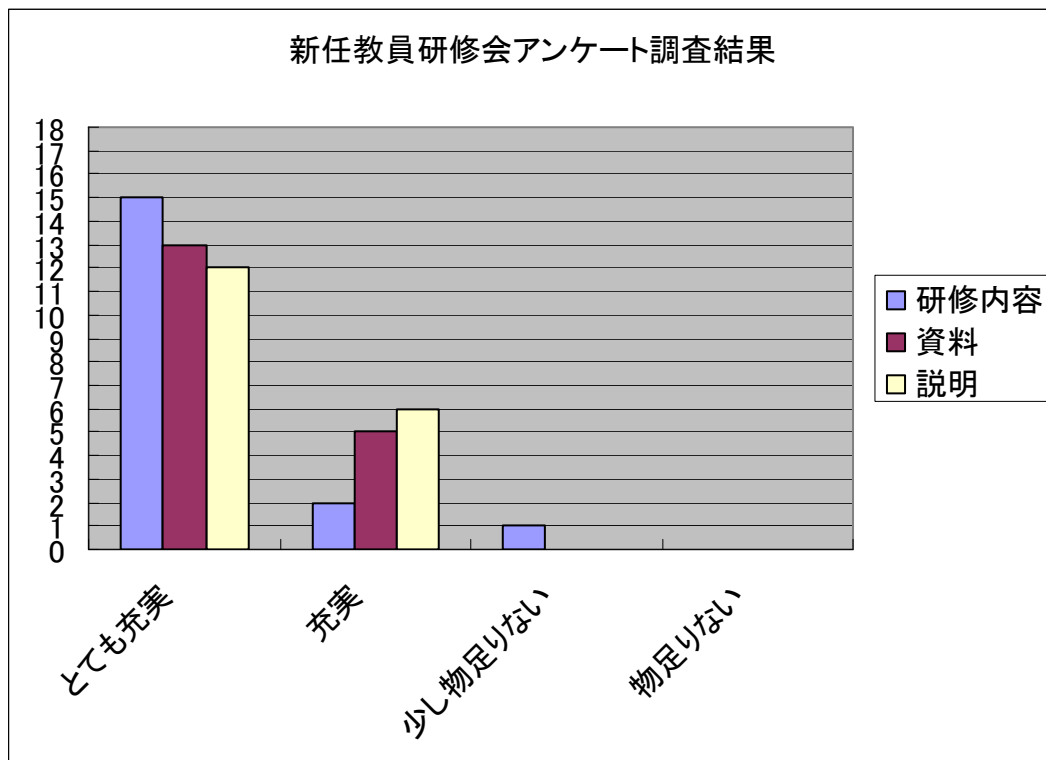
研修に参加してよかった点としては、

- ①研修を通じて玉川大学の理念、運営組織、教育方法、キャンパスの様子を把握できた。
- ②4月以降の勤務への安心感が得られた（特に、何がわからなければどこに問い合わせればよいのかがはっきりした）。
- ③すでにいただいた資料やインターネットでは得ることのできなかつた情報が得られ、4月からの勤務に関する具体的なイメージが描けた。
- ④理想的なこと（建学の精神等）と実務的なこととのバランスがよくとられていると感じた。
- ⑤職員の方々が大変親切にしてくださり助かった。

などの意見が多くあった。これらの意見から、本研修会の目的は達成できていると評価できる。

一方で、改善を要する点として以下の項目が上げられた。

- ①「サービスについて」の部分に、もう少し詳しい説明があった方がよかったと思う。
- ②受身が多いので、すこし双方向の作業の時間もあるとよい。
- ③新任の教員にはボリュームがありすぎるかもしれない。



以上



Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 経営学部国際経営学科准教授 大金 エセル 先生

国際社会のビジネスリーダー育成を目指す経営学部における EC での活用

大金先生は、応用言語学、外国語 (EFL)、教育英語を専門分野に、イングリッシュ・コミュニケーションのまとめ役を務め、イングリッシュ・ワークショップ、英語科指導法、プロジェクトセミナーなどを担当されています。21世紀の国際社会に必要なパブリックマインドを持ち、世界を舞台にリーダーシップが発揮できる人材養成の核となるよう、学部をあげて取り組んでいる科目「イングリッシュ・コミュニケーション (EC)」の Blackboard@Tamagawa を活用した事例を紹介いただきます。



科目の規模と授業での Blackboard の活用例

経営学部の主要な英語プログラムには English Communication (EC) と Intensive English Communication (IEC) があります。EC I と II (それぞれ 4 単位) は国際経営学科と観光経営学科の 1 年生全員 (平成 19 年度は約 260 名) の必修科目で、IEC の I と II (それぞれ 4 単位) は国際経営学科 2 年生の選択科目 (平成 19 年度は約 120 名が選択)、観光経営学科 2 年生の必修科目 (平成 20 年度から) です。EC、IEC のいずれのコースも約 12 名～18 名の小規模サイズのクラスで行われ、月曜と水曜、金曜の 100 分週 3 回のスキル別の授業から構成されます。EC の場合は Listening & Speaking、Reading & Writing、TOEIC Preparation の 3 スキルで、IEC の場合は Writing、Reading、TOEIC Preparation の 3 スキルです。

経営学部の 1 年生は入学直後に Michigan

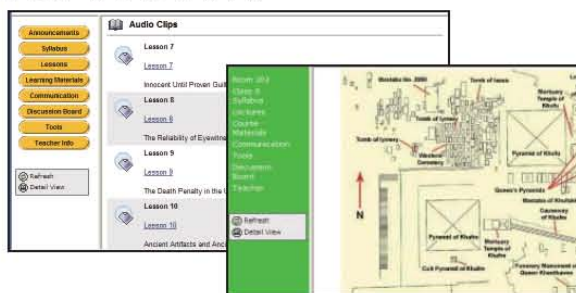
Placement Test を受け、能力別に 14 の EC クラスに分けられます。100 分の授業を週 3 回受け、それを 12 週つづけます。その間に midterm (中間試験) と final (期末試験) の 2 回のテスト、7 月第 2 土曜には TOEIC Bridge (小テスト)、1 月第 2 土曜には TOEIC IP のテストの受験が義務づけられ、最終週の feedback の授業を迎えることになります。2 年次の IEC の授業は 1 年次の TOEIC IP の結果に基づいて 11 のクラスに分けられます。EC では EC II が終了するまでに TOEIC IP スコアが 600 点、IEC では IEC II が終了するまでに TOEIC IP スコアが 700 点になることを目標にしています。

このように膨大な、複雑な経営学部の英語プログラムを管理・運営するのに Blackboard (以下 Bb) が利用されています。

まず、EC、IEC の受講生の Bb 画面はすべて英語で表記されます。Announcement、Syllabus、Lectures、Course Materials、

Communication、Discussion Board、Tools、Teacher Information などのコースメニューやボタンはすべて英語表記です。これに慣れると、学生は英語のホームページなどを気軽に、自信を持ってネット・サーフするようになります。EC、IEC のそれぞれのコースにはシラバスやテキストのオーディオ・クリップなどが載っていて、学生の予習・復習に利用されています。

EC、IEC の先生は個別に、自分のクラスのレベルに合わせて Bb 上にセルフ・スタディ用のタスクを載せています。たとえば池本佐恵子先生は Test Manager の機能を利用して Reading のクラス用に文法事項のクイズを作成し、それを Bb 上に載せています。このクイズは学生が自信を持って英語を使うことに役立っています。私自身は Lecture エリアに毎週のレッスン・プランを載せています。事前にそれを見た学生は、授業内で一人ひとりのやるべきことや、グループ・アクティビティの内容が分かり、テキストに関連するウェブ・サイトへのリンクや写真、グラフなどを見ることができ、追加のリーディング課題、宿題などが分かるようになっています。この Bb 上に載ったレッスン・プランを見れば、私自身もそうですが、学生もセメスター期間中、授業の進み具合を一目で理解することができるのです。



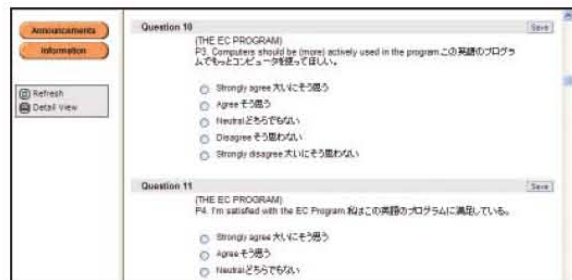
Bb コース内コンテンツ内容

経営学部の EC と IEC プログラムに関わる教員 28 名のうち、積極的に Bb を活用している教員は約半数にとどまっていますが、2007 年度秋セメスターのデータを見ると、経営学部 1 年生の全員が Bb のボタンをクリックし、EC コースの内容をチェックしていることが分かります。また Bb の EC データによれば、教員がコンテンツやアナウンスメントを Bb 上にアッ

プロードしたり、コミュニケーション・ツールを使ったとき、学生がより大きく反応しているのが分かります。

Blackboard で授業アンケートを実施

EC と IEC プログラムでは毎セメスターの終わりに Bb を利用して、これらのプログラム用に特別に製作された授業アンケートを実施しています。学生の学習状況、EC プログラム、3 つのスキル別のクラス、テキスト、教員などについて、毎回 46 の質問を出し、学生に 5 段階で評価してもらいます。さらに、EC と IEC のプログラム、スキル別のクラスについて、学生の自由な質問やコメント、提案を記入してもらいます。これらはもちろん無記名で行われます。



Bb コース内アンケート内容

この授業アンケートはセメスター最後の 2 回の授業で行うことになっていますが、これは Bb 上で行うため、学生はセメスター最後の 2 週間のいつでもアクセスし、アンケートに答えることができます。学生の回答率は毎回およそ 70%～85% です。これらのアンケート結果は経営学部の英語プログラムと教員に貴重なフィードバックを提供しています。

My Group の利用

EC と IEC プログラムでは Bb の My Group 機能を積極的に活用しています。毎年、経営学部の 1 年生と 2 年生は EC と IEC のクラスに分けられます。それらのクラスごとに、履修登録や、EC ハンドブック、クラス分け、授業日程、mid-term と final の試験日、TOEIC の試験日、教室の配置などについての重要な情報が、学生と教員のために、タイムリーにアップロードされます。（翻訳・日本語補足 佐藤 成男）



Tamagawa University

Blackboard@Tamagawa– A Good Practice

01 Department of International Management Ethel Ogane

English communication in the college of Business Administration

Dr. Ethel Ogane specializes in second language acquisition and teaching English as a second/foreign language. She is in charge of the English Communication (EC) program in the College of Business Administration and teaches English Teaching Methodology, a Project Seminar, and an English Workshop. Here she explains how the EC teachers make use of Blackboard@Tamagawa in their efforts to help their students improve their English proficiency.



Introduction

As previous e-Education newsletters have shown, many departments and teachers across the Tamagawa campus are using the Blackboard in a variety of ways to assist students in their studies and to help them enjoy and succeed in their learning endeavors. The Blackboard is also being used to assess the students' progress through their courses. The English Communication Program in the College of Business Administration utilizes the Blackboard to not only manage student learning, but to also support our teachers' efforts in this process.

The College of Business Administration English Communication Program

Our EC Program consists of four basic courses. English Communication I (EC I) and English Communication II (EC II) are required first-year courses for all Business Administration students. Intensive English Communication I (IEC I) and Intensive English Communication II (IEC II) are required second-year courses for students in the Department of Tourism and Hospitality Management and elective courses for the Department of International Management students. Each course is worth four credits and consists of three skill-based classes: Reading and

Writing, Listening and Speaking, and TOEIC Preparation for EC I and EC II; Reading, Writing and TOEIC Preparation for IEC I and IEC II. Each skill-based class meets once a week for 100 minutes during the 15-week semester. There is a midterm test after the first six weeks of lessons and a final test after the next six weeks for each of these classes. A review and feedback week takes place at the end of the semester when teachers review the work covered during the term and preview the upcoming term or year.

Students are streamed into their EC classes according to their ability level as measured by a placement test given each year at the beginning of April to all first-year students. Second-year students are placed into IEC classes according to their TOEIC IP scores. The TOEIC Bridge is administered at the end of spring semester and the TOEIC IP is given in January at the end of the fall semester to all first-year students. IEC students will be offered the TOEIC IP at the end of each semester. Students' scores on the TOEIC IP count as 10% of their course grades. Many of our students find that the TOEIC is a real challenge. However, as Business majors, they are aware that achievement on this proficiency test is not only important academically, but a key step up the career ladder after graduation.

We try to keep our classes small in size and plan to have

not more than 18 students in this year's EC classes and are expecting from 10 to 15 in the IEC classes. In this way, students can more easily form a learning community as they meet together three times a week throughout the year, and our teachers are able to give more personal attention and time to each student.

How EC teachers use the Blackboard

Every semester a Blackboard course is set up for each skill based class with a basic 'course menu' which includes buttons for Announcements, Syllabus, Lectures, Course Materials, Communication, Discussion Board, Tools, and Teacher Information. English is pre-selected as the language of the course so all buttons, titles, and other text supplied by the BB system are in English. This provides students with an opportunity to become more comfortable and confident navigating through English websites. Each BB course is packaged with the EC or IEC syllabus, and audio files of the relevant textbook audio materials. These sound clips can be used by students to preview or review classroom work.

Some of our teachers have extended this basic BB course structure to suit their individual class needs creating further online learning opportunities for their students. For example, Saeko Ikemoto has developed quizzes based on reading passages and basic grammar points using the Test Manager function. She has found that these exercises have helped her students develop a stronger foundation in English and built up their confidence in using the language. I have used the Lecture area to upload weekly lesson plans which include small group seating plans; individual work activities; group work activities; website links; photographs; graphs, and charts related to reading chapters; additional reading passages, and homework assignments. These lesson plans provide an easily accessible and useful record, for both myself and my students, of our work as it progresses through the semester.



COLLEGE English Communication

Although we have found that only about half of our teachers have been fully and actively using the various BB functions, Blackboard course statistics for the Fall 2007 semester show that all of our first-year students are clicking onto the BB and checking what is online in their courses. The statistics also appear to show that there is much more student online activity when the teacher is uploading content or announcements, or using BB communication tools.

Administering the EC Questionnaire

At the end of each semester, we use the BLACKBOARD to administer a questionnaire to every EC and IEC student via BB courses made especially for this purpose. The questionnaire consists of 46 five-point Likert scale questions on student study habits, the EC program, the skill-based classes, textbooks and teachers; and 4 open-ended items which ask for the students' questions, comments, or suggestions regarding the program and each of their three classes. The questionnaires are anonymous.



CEC CLASS 1-11 QUESTIONNAIRE

Teachers provide time for the students to answer the questionnaire in their last two class sessions, but because the questionnaire is on the BLACKBOARD, students can access and complete it anytime during the final two weeks of the semester. Response rates have been adequate ranging from @70% to 85%. The results provide the program and the teachers with valuable feedback from the students. We have found, for example, that a majority of the 2007 first-year students perceive their class textbooks to be useful and relevant to their learning.

Using MY Groups

The EC Program has also been actively using the My Group area of the BLACKBOARD. Each year we create separate groups for first-year and second-year students, and teachers. We are thus able to make important information on course registration, EC handbooks and guidebooks, class placements and schedules, classroom assignments, and TOEIC registration and test dates available in a timely fashion to both teachers and students.

玉川学園・玉川大学

e-Education NewsLetter

2008 Vol.2

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 工学部ソフトウェアサイエンス学科教授： 土山 牧夫 先生

就職指導におけるグループの活用

土山先生は工学部メディアネットワーク学科においてインターンシップや就職に関する指導を担当されてきました。これらの指導では、企業から届けられました受け入れ回答書、会社案内や求人票をどのような形で掲示するのが学生にとって有効な情報となるのかを考えることが、指導を担当する時の一つの課題となってきたとのことです。そのような状況にありましたが、Blackboard@Tamagawaを活用することにより、この課題が大きく改善したことを就職指導の例を通してご紹介頂きます。



◆グループ名：メディアネットワーク学科就職指導（メディアネットワーク学科4年生66名・大学院生2名）

◆概要：学生の就職指導に際して、求人票や採用担当者からの詳細情報などを掲載。土山先生をグループの代表として、メディアネットワーク学科就職担当教員およびキャリアセンターの学部担当職員をアシスタントとして登録し連携をはかっている。2007年度（3年次）より継続して使用。

Blackboard 利用のきっかけ

Blackboard（以下Bb）については、教授会や活用事例などを通して積極的に紹介されていましたが、私にとっては、なかなか始めるきっかけがつかめませんでした。ところが、たまたま2005年8月に金沢学院大学で学会があり、この時、開催されましたeラーニングのシンポジウムに参加する機会がありました。この中の

パネルリストの一人として、現在、eエデュケーションセンター副センター長である橋本順一先生が“玉川大学における全学的eラーニングの取り組み”と題して講演されました。この講演を聴講しながら、遅くとも来年の春semesterからはBbを使用しようという強い思いを持ちました。

その後、9月を迎えて、一緒に実験の指導をすることになった先生が、Bbを使用するためにコース設定の依頼をメディア教育推進室宛へ出されました。それをきっかけとして、コース設定や使用方法が分かりましたので、私が担当している他の授業についても、コース設定の依頼をしたのが始まりです。現在では、授業や卒研指導をはじめとして、インターンシップや就職指導、さらに工学部展実行委員会の連絡など、様々なところでBbを活用させて頂いております。

就職指導における Blackboard の活用

授業科目で Bb を利用する場合は、コースとして、就職指導や学部展メンバーなど単位が発生しない場合はグループとして開設しています。今回は、私が使用している就職指導に関するグループについてご紹介させていただきます。

就職指導の中から求人票の掲示についてご紹介します。以前就職担当をした時はキャリアセンターから学内便で送付されてくる求人票のコピーと、直接、企業から学科宛に届けられた会社案内をそれぞれファイルに綴じて書棚に整理して、学生に提供していました。このため、学生は私の研究室を訪問して、書棚にある求人ファイルや会社案内のファイルを一枚ずつめくりながら会社を探します。そして関心のある企業が見つかったら、その企業の情報をノートにメモしたり、教員に申し出て必要な箇所をコピーしていました。

これに対して、今回の就職指導では Bb を取り入れました。そこで、学科に届きました求人票の中から、選別した求人票をスキャナでパソコンに取り込み、PDF ファイルに変換して Bb に掲示するようにしました。この時、訪問された人事担当者や OB との面談内容などの情報があれば、図 1 のようにできるだけ一緒に掲載しています。また、会社のホームページアドレスも掲載しますので、会社案内が無くても、学生は、直接、会社のホームページから採用情報や企業情報が入手できます。企業によっては、会社案内や仕事内容などを説明したパワーポイントのファイルなどを提供して下さるところもあり、そのような資料もあれば一緒に掲示しています。

学生の指導

学生と面談しながら企業を紹介する時も Bb を見ながら指導ができます。このようにすることにより、学生は帰宅してから Bb の同じ画面を見て確認できることもあり、今までよりも効率の良い就職指導が可能になったのではないかと考えています。

技術系の就職活動もインターネットによる個人応募の傾向が強くなってきています。このため、本グループを参照している学生は 3 分の 1 位だと思われます。しかしながら、利用している学生は、この様なグループの必要性を強く感じているようです。



図 1 求人票の掲載例



図 2 求人票掲載をアナウンスにて連絡

おわりに

本稿では私が本年度使用中の Bb を用いた就職指導グループについてご紹介させていただきました。私にとって、Bb が有効に使用できている一つの理由として、Bb に関する様々な設定依頼や質問について、メディア教育推進室にメールを出しますと、素早い対応をして頂けていることが挙げられます。これからも、メディア教育推進室に助けられながら、色々と使用方法を工夫して、Bb を使用した効率の良い指導方法を考えていきたいと思っています。

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 経営学部国際経営学科准教授：喜治 都 先生

国際経営学科における重要な基礎知識を着実に身につける復習教材としての活用

喜治先生は、理論経済学（主としてマクロ経済理論・マクロ経済政策・マクロ的所得分配理論）を専門分野とされています。経営学部では、専門教育の入門科目として、マクロ経済学・ミクロ経済学を、高度な専門性を養う科目群においては、国際金融論等を担当されています。

国際経営学科では、今日の社会が求めている人材の養成を目指し、専門教育の基礎知識を着実に身につけていくために、Blackboard@Tamagawa（以下Bb）を復習教材として有効活用されている事例を紹介いただきます。



科目の実施規模とBlackboardの活用

- ◆科目名：ミクロ経済学 1年生 43名
マクロ経済学 1年生 55名

◆授業の概要：ミクロ経済理論については、経済理論の基本である需要と供給、および市場均衡といった概念を中心に、消費者や企業など個々の経済主体の合理的行動やそれを前提とした市場の役割、理論上のさまざまな概念や理論的分析手法についての理解を深める。マクロ経済学については、主にケインズ・モデルの理解、理論モデルにおける計算問題の解法とその応用、マクロ経済問題と財政および金融政策についての理解を深める。

Blackboardに副教材を掲載

「ミクロ経済学」「マクロ経済学」では、経済理論の基礎を学ぶべく、初心者には一見すると難解とも思われる経済用語や経済理論を、入門レベルで修得することを目的としています。経

済学では理論モデルを数式や図で表しますが、それらはただ見て理解しようとするよりも、自ら「書く」あるいは「描く」という作業を通じて経済変数間の関数関係を理解し、論理的思考および応用力を高めることができますので、講義はあくまでもホワイト・ボードを使って教員が説明し、学生はノートをとるという形式を基本としています。このような講義を前提として、各回の講義内容がどれくらい理解できたかを確認し、また復習することによって理解を確実にするための副教材として、ブラックボードを活用しています。

Blackboard コース内容

主な内容は、①チェック・シート、②クイズ、③練習問題、④もう一步進んでみよう、⑤Webの5つです。

①の「チェック・シート」とは毎回の講義で出てくる主な経済用語や理論を、10項目くら

い列挙したものです。専門科目の場合、まずは専門用語をしっかりと理解することが重要ですので、それらの用語を自分なりに理解し、それをきちんと書き出してまとめるためのものです。テキストや自分のノートを参考に、自分でまとめることが重要ですので、あえて対応する用語集は用意していません。



図1 チェックシート

②の「クイズ」は、毎回の講義が確実に理解できているかを確認するための「択一式」クイズで、公務員試験など各種資格試験における択一式試験の様式にしています。B b上でクリックして解答を教員に送信するシステムで、送信すると「正解および解説」が返信され、教員側は学生の学習状況が把握できるようになっています。これは強制ではなく、あくまでも学生の自主性にまかせています。択一式ですので、適当に解答を送信したり人に聞いて送ることもできますが、そうではなく、解答を送信した後に返信されてくる「正解および解説」でしっかりと復習することに「クイズ」の意義があります。

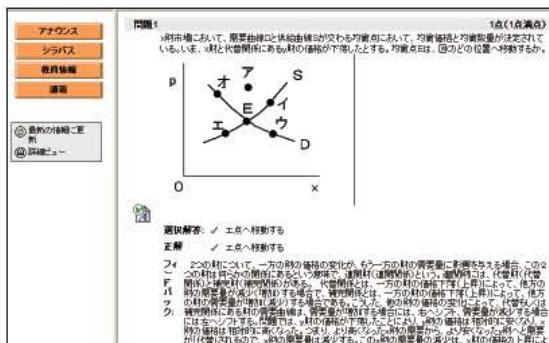


図2 クイズとフィードバック

③の「練習問題」は、毎回の講義内容についてのドリル形式でのプリントです。授業時にプリント・アウトしたものを配布し、宿題として

利用したり、また講義終了時に復習のために利用したりしますが、時間がない場合などはB bに掲載したものを各自プリントアウトするようにしています。

④の「もう一步進んでみよう」は、講義内容に関連したもので、講義中に説明できなかったもの、テキストに載っていないもの、現実経済での理論の応用、最近の経済事情など、特に、現実の経済活動や経済現象を理解するにあたり経済学的知識をどのように利用していけばよいかに焦点をあてて紹介しています。

⑤の「Web」は、経済に関する情報、統計、トピックなどを各自が自分で検索して見ることができるよう、日本銀行、財務省、総務省などのサイトを紹介します。

今後に向けて

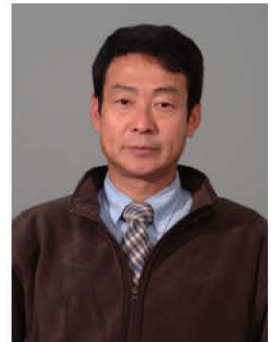
B bのコンテンツは、学生が自主的に予習・復習をするための副教材として位置づけていますので、第1回目の講義時に利用の仕方を説明した後は、毎回の講義の際にB bのコンテンツ内容について読んで学習するように改めて指示をすることはなく、また、学生がどれくらいB bを利用して学習しているかチェックしたりすることもありません。しかしながら、学生の自主性にまかせるとはいえ、学生はよほどの興味がわかない限り関心をもって取り組むことはあまりないようですので、今後はB bのコンテンツを利用して課題を作成させたり、クイズや練習問題を成績評価に反映させるなど、受講生のレベル・アップにつながるような積極的なB b利用に向けての工夫・改善が必要であると考えております。また、経済理論の学習が無味乾燥で抽象的なもので終わらないよう、Bbではより日常的な経済現象・経済事象を日々取り入れて、学生にとって経済学がより身近に感じられるようなコンテンツを作成すべく構想中です。最後にコンテンツの作成につきましては当初の企画から今日まで、メディア教育推進室のスタッフの皆様にご指導・ご協力いただいておりますこと、心より感謝申し上げます。

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 教育学部教育学科教授：金井 茂夫 先生

スポーツ教育におけるイメージ創りとしての活用

金井先生は、主として水泳指導法・健康観の多角的検討で精神と心の健康についてを研究テーマに、スポーツ科学だけでなく幅広い研究をされています。コア科目群の体育や生涯スポーツ演習をはじめ、専門教育の科目として、体育実技・体育科指導法・体育史・体育原理を、そして高度な専門性を養う科目群においては、教育学演習Ⅱ等を担当されています。教育学科では、時代の激しい変化や複雑さに対応できる柔軟性と高い問題意識で課題を解決する能力を備え、社会に貢献できる人材育成に深く関わる優れた教育者の養成を目指しています。今回は Blackboard@Tamagawa（以下 Bb）を動画を使う事前学習教材として有効活用されている事例を紹介いただきます。



教育はイメージ創り

スポーツ教育は空間的な拡がり、時間的なスピードの速さなどからイメージ創りが出来ると技術の習得も早くなり意欲の向上に繋がります。決められた授業時間の中では多くの種目は1回（時間）しか取り扱えません。その点で受講前のイメージ創りが特に大切となります。Bbは教育効果を上げるツールとして積極的に取り入れたいと考えています。



図1 体育祭動画教材

体育Ⅱ（全学1年生対象 1年生 1,933名）

この授業は体育祭のマスゲームを発表する為の集中授業です。はじめは体育館で男女に分かれて個人の動きから練習します。ひとつひとつの動きは、そんなに難しくはないのですが、音楽にあわせての動きが分かりにくいのです。また、約1,000名の集団の中で自分がどのような位置にいて、どのような風に見えるのかが全く分からないのです。その為、始めの頃は練習意欲を失いかけてしまいます。また、グループ練習が終わりグラウンドに出て本番同様の練習は併設学部との場所の競合や晴天時の陽射しによる疲労を考えるとなるべく短時間に練習を進めたいと考えています。この時に前年度のビデオや前回の練習を載せることでBbは絶大な威力が期待できます。グラウンドという大空間で創られた絵模様の歪みや時間差が映像として確認できるからです。自分がギャラリーからとても美しく見えて演技終了後の盛大な拍手までイ

メッセージできれば満点です。

もうひとつ、体育の授業は天候にも左右されず、グラウンドの予定でも雨天時には場所の変更は付き物です。そのような時にも Bb は効果抜群です。各学部の男女あわせて 2,000 人が、その対象となりますので職員が出勤してからの掲示では間に合いません。朝の 6 時でも担当の教員が自宅から Bb にアクセスしてアナウンスをすれば、学生の方もその時点で分かるわけですから本当に便利です。

体育科指導法(教育学部選択科目 2 年生 78 名)

この授業は小学校の教員を目指す学生の為の科目です。小学校の体育授業では自分がその技術を出せることもよいですが、安全で効率的な指導法の習得が大切なのです。その指導法の習得にはやはりイメージが大切となります。水泳の「飛び込み」は危険と怖さが付き纏い、特に女子学生は怖がります。



図 2 水泳飛び込み動画教材

安全で痛くなく且つ短時間で習得できる指導法は事前に映像として見ていると、その技能習得効果が上がります。また、お互いが指導し合う演習よりも実際に低学年の児童が行っている場面を見ていた方が教育現場のイメージがしや

すくなります。また、これですと欠席した学生も見学した学生と殆ど同じ学習効果があります。

体育原理(教育学部選択科目 2 年生 29 名)

体育 I (コア科目 1 年生 218 名)

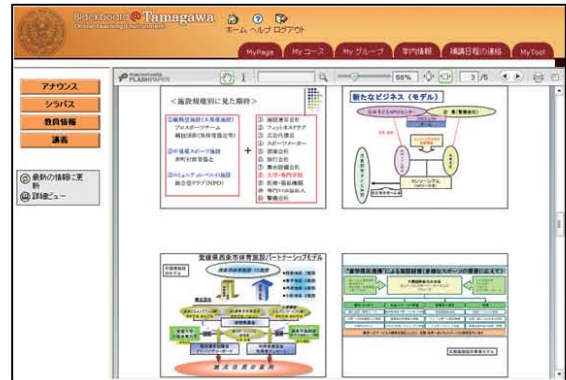


図 3 スライド教材

一般的にパワーポイントのスライドを授業後の復習として見直すことも可能ですが、重要なことは予習だと思うのです。授業前に Bb に掲載することで学生は授業内容をスライドから事前にイメージ化し、スライドを配布資料の状態ですべてプリントアウトして授業に臨むことです。このためには教員も講義前にスライドショーを作成しておかなくてはなりません。この双方の行為が授業内容と学習効果を高めることとなります。レジュメやレポート課題も載せておけば印刷の手間も省けて本当に便利なツールだと思います。

おわりに

このように Bb は確かに便利なツールではありますが課題も多くあります。資料写真のスキャナーによる取り込みはまだしも映像化するとなるとわずかな数秒の動画の作成でも PC の性能も含めてこれらを準備するために時間と IT スキルが必要だということです。教員は研究活動や講義内容の準備だけでも大変なので PC のマニュアル本などを読んでいる時間がないのが実状です。本格的な e ラーニングの推進にはメディア教育推進室や PC を得意とする学生の活用などの教員を支援する組織の構築・充実が不可欠だと思います。

Ⅲ コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

前年度同様、今年度も春・秋学期においてそれぞれ最終授業にて実施した（一部、科目担当者の都合等により補講・試験期間中に実施）。対象科目はコア科目の全科目（実験・実技科目を除く）であるが、学期により対象科目群を限定している。

春学期：全人教育・FYE 科目群、言語表現科目群、社会文化科目群

秋学期：全人教育・FYE 科目群、自然科学科目群、生活関連・総合科目群

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝147名／152名（96.7%）

秋学期＝113名／120名（94.2%）

実施開講クラス数：春学期＝253クラス／263クラス（96.2%）

秋学期＝159クラス／172クラス（92.4%）

回答学生数：春学期＝9,681名／11,078名（87.4%）

秋学期＝6,084名／7,532名（80.8%）

(2) 実施時期

春学期：7月16日（水）～7月30日（水）

秋学期：1月13日（火）～1月27日（火）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がクラスでマークシート用紙を配布、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙（p.82 参照）

2. 集計結果及び公表（p.57～68 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

コア科目群（全体）、全人教育論、全人教育・FYE 科目群、言語表現科目群、言語表現

科目群（英語）、言語表現科目群（英語以外の語学）、社会文化科目群、自然科学科目群、生活関連・総合科目群

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記9分類についてはその平均値を学内のみを対象にホームページで公表している。

平成20年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

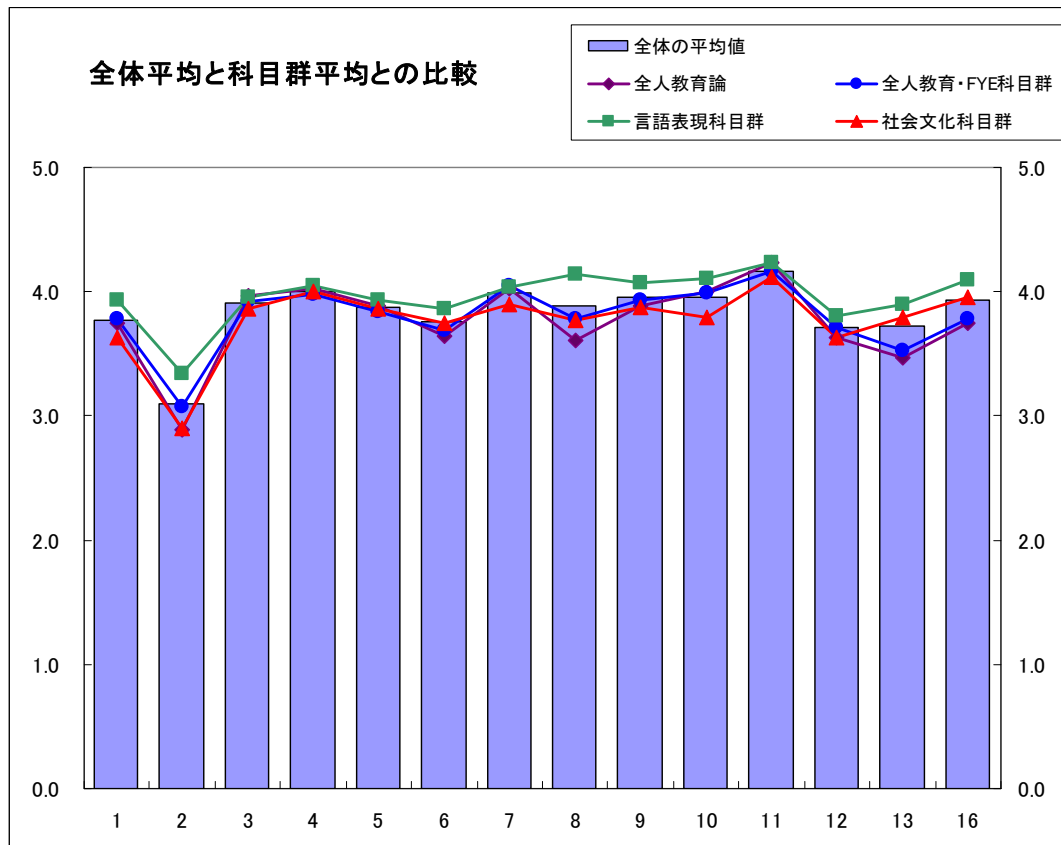
玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 9677

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	21.5%	43.8%	26.9%	6.4%	1.5%	12
	2 授業以外によく予習復習した	3.1	10.3%	23.5%	39.0%	19.4%	7.8%	14
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	30.2%	38.7%	24.8%	5.1%	1.3%	25
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	34.5%	37.4%	23.5%	3.6%	1.0%	26
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	29.4%	36.0%	28.7%	4.4%	1.4%	44
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.8	28.3%	32.2%	29.2%	7.8%	2.5%	37
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	40.2%	30.1%	20.9%	6.3%	2.5%	29
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.9	33.8%	31.8%	25.9%	6.1%	2.4%	25
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	34.3%	35.0%	24.4%	4.5%	1.8%	22
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	35.1%	34.0%	24.3%	5.0%	1.6%	30
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	45.5%	30.8%	20.0%	2.6%	1.1%	21
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	23.8%	37.2%	28.3%	7.8%	2.9%
13 授業の内容に興味をもてた		3.7	28.3%	32.3%	27.3%	7.6%	4.5%	57

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.9	36.5%	31.3%	23.7%	5.5%	3.0%	1071



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を
除いた平均値

平均値 = (「5」回答数
× 5 + 「4」回答数 × 4 +
「3」回答数 × 3 + 「2」回
答数 × 2 + 「1」回答数 ×
1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミ
スの数

平成20年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

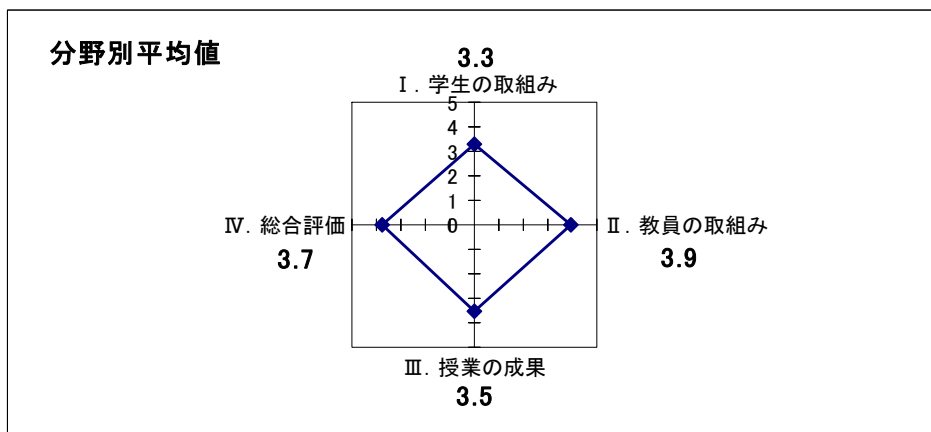
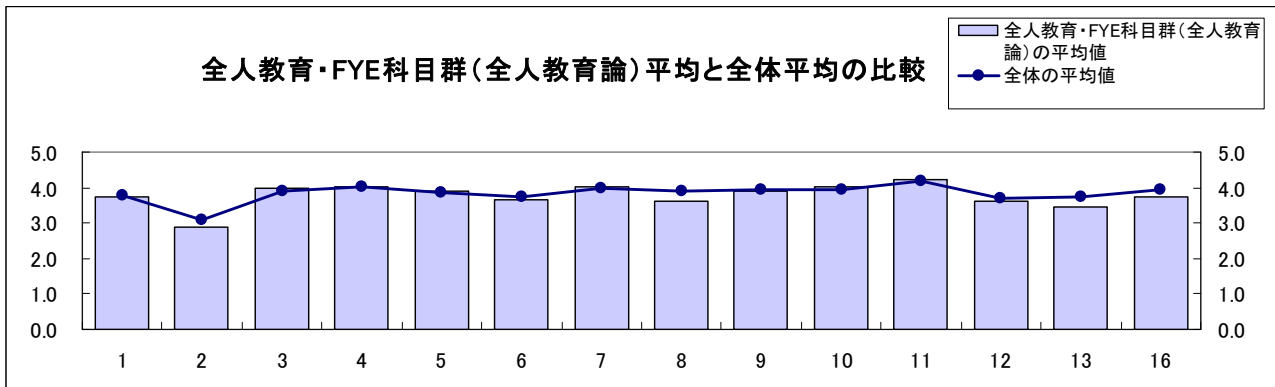
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 全人教育論

回答数(全体): 1838

分野	設問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	20.5%	43.2%	28.4%	6.1%	1.8%	0
	2 授業以外によく予習復習した	2.9	7.4%	18.5%	40.1%	23.8%	10.2%	3
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	31.7%	39.9%	23.1%	4.4%	1.0%	4
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	33.8%	39.5%	23.3%	2.5%	0.9%	6
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	28.2%	38.5%	28.5%	3.6%	1.1%	9
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.6	24.5%	31.3%	31.1%	10.6%	2.5%	6
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	41.8%	29.7%	20.3%	5.9%	2.3%	6
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.6	22.3%	31.8%	33.4%	9.2%	3.3%	4
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	31.1%	35.3%	26.7%	4.7%	2.1%	5
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	36.0%	35.4%	23.1%	4.5%	1.1%	6
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	49.3%	29.3%	18.3%	2.2%	1.0%	3
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.6	21.0%	35.6%	31.9%	8.0%	3.4%
13 授業の内容に興味をもてた		3.5	20.9%	29.9%	31.4%	10.8%	7.0%	6

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.7	30.1%	29.1%	30.4%	6.2%	4.3%	142



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成20年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

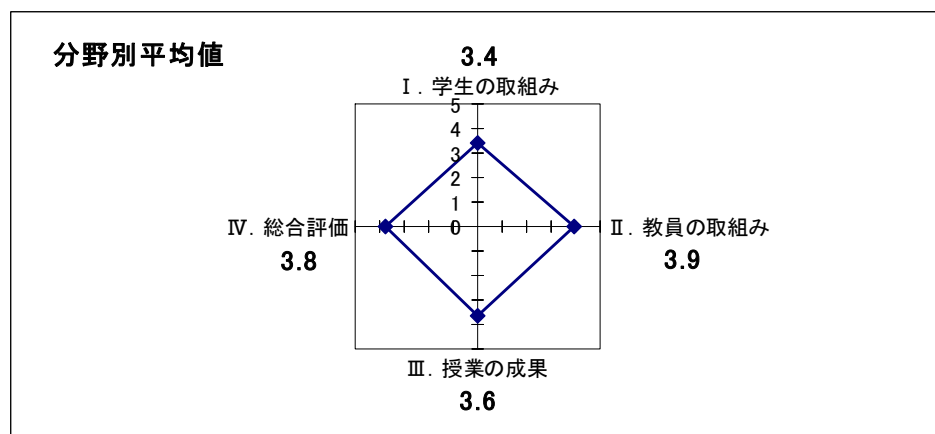
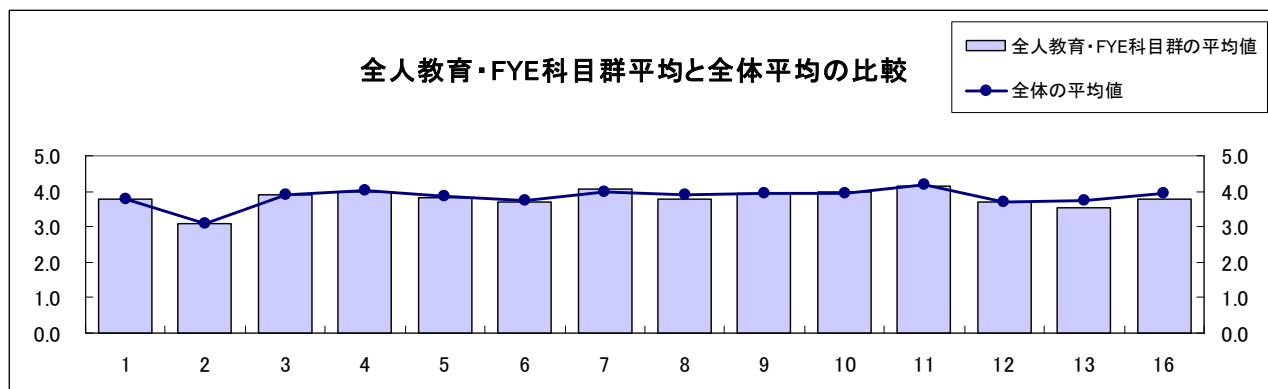
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群

回答数(全体): 3605

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	21.2%	44.1%	27.8%	5.4%	1.6%	4
	2 授業以外によく予習復習した	3.1	9.1%	23.8%	39.8%	19.4%	7.9%	8
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	29.1%	40.5%	25.0%	4.3%	1.2%	8
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	31.4%	40.0%	24.6%	3.0%	0.9%	10
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.8	26.9%	37.6%	29.4%	4.8%	1.3%	18
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.7	24.5%	33.5%	30.9%	8.6%	2.4%	12
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	40.8%	32.0%	20.3%	4.8%	2.0%	9
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	28.0%	34.0%	29.0%	6.7%	2.4%	7
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	32.2%	36.8%	25.2%	4.2%	1.6%	5
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	34.6%	36.4%	23.9%	4.1%	1.0%	11
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	44.2%	32.4%	19.9%	2.6%	1.0%	5
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	22.3%	38.6%	29.8%	6.6%	2.6%
13 授業の内容に興味をもてた		3.5	20.2%	33.0%	31.8%	9.2%	5.9%	14

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.8	29.7%	32.2%	28.2%	5.8%	4.0%	334



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成20年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

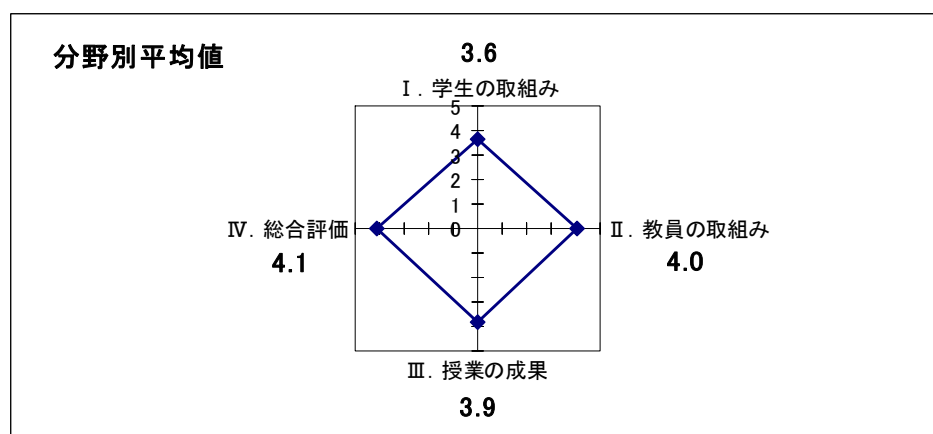
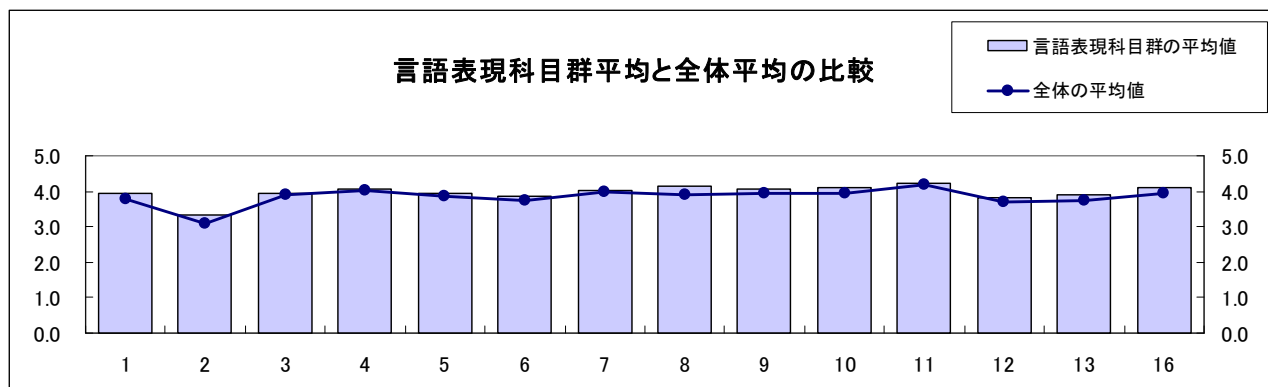
玉川大学

コア科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2795

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	26.7%	46.2%	21.4%	4.7%	0.9%	5
	2 授業以外によく予習復習した	3.3	13.6%	30.8%	36.6%	14.5%	4.5%	3
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	32.4%	37.7%	24.5%	4.3%	1.1%	8
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	37.1%	36.4%	22.2%	3.4%	0.9%	6
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	31.5%	36.5%	27.2%	3.4%	1.4%	6
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	31.5%	32.7%	28.4%	5.7%	1.6%	10
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	41.4%	30.6%	19.7%	6.2%	2.0%	10
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.1	44.5%	31.5%	19.3%	3.5%	1.3%	7
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.1	39.5%	34.6%	21.3%	3.1%	1.5%	5
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.1	41.5%	33.8%	20.0%	3.7%	1.0%	7
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	48.2%	31.4%	17.5%	2.0%	0.9%	7
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	27.2%	38.0%	25.6%	7.1%	2.2%
13 授業の内容に興味をもてた		3.9	34.7%	31.6%	25.2%	5.5%	3.0%	19

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	43.3%	31.2%	19.4%	4.2%	1.9%	332



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成20年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

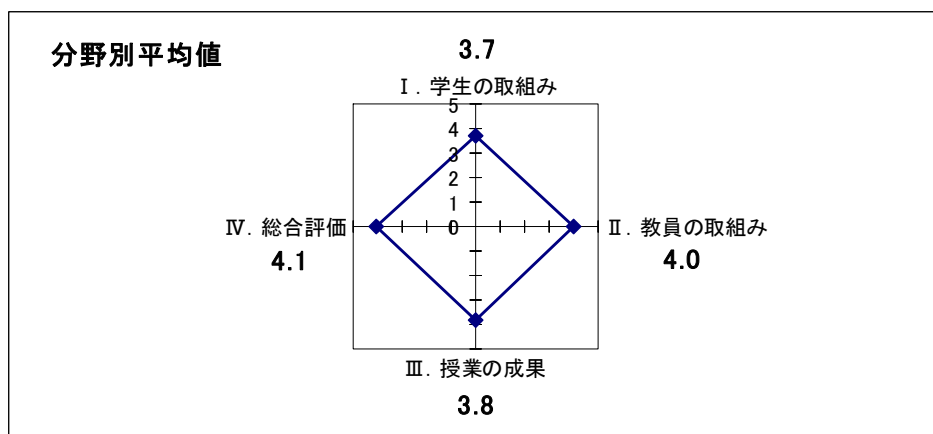
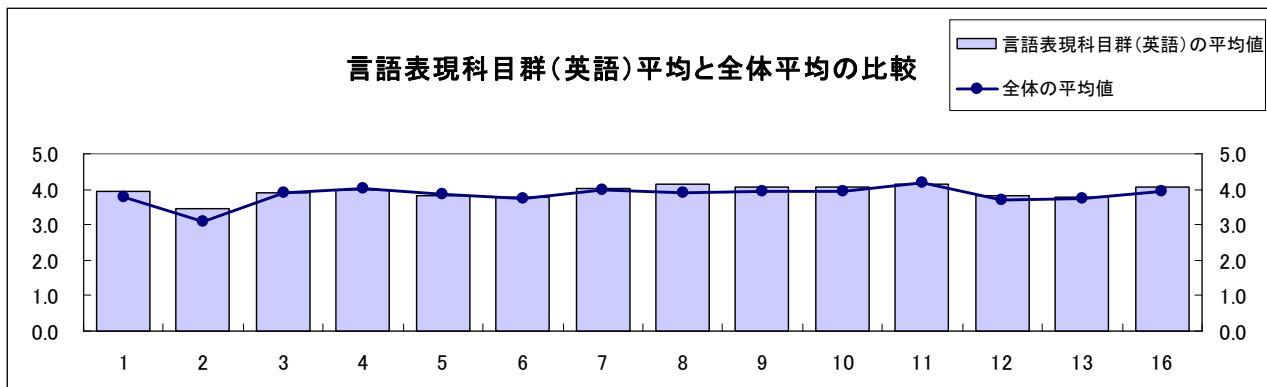
玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語

回答数(全体): 1305

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	26.2%	47.4%	20.7%	4.7%	1.0%	2
	2 授業以外によく予習復習した	3.4	15.3%	33.8%	34.2%	12.8%	3.8%	2
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	29.2%	39.0%	26.7%	4.1%	1.0%	3
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	33.9%	37.1%	23.8%	4.1%	1.1%	0
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.8	28.4%	35.0%	29.7%	4.4%	2.5%	1
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.8	28.6%	31.8%	30.7%	7.1%	1.8%	3
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	39.3%	32.6%	20.0%	6.1%	2.1%	4
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.1	42.7%	34.1%	18.5%	3.5%	1.3%	2
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	37.8%	35.9%	21.5%	2.9%	1.8%	2
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.1	39.4%	35.4%	20.1%	4.0%	1.2%	1
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	43.8%	32.8%	19.9%	2.0%	1.5%	2
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	26.5%	38.3%	26.8%	6.1%	2.2%
13 授業の内容に興味をもてた		3.8	29.4%	32.2%	29.1%	5.5%	3.8%	10

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	41.0%	31.5%	21.5%	3.9%	2.1%	154



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成20年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

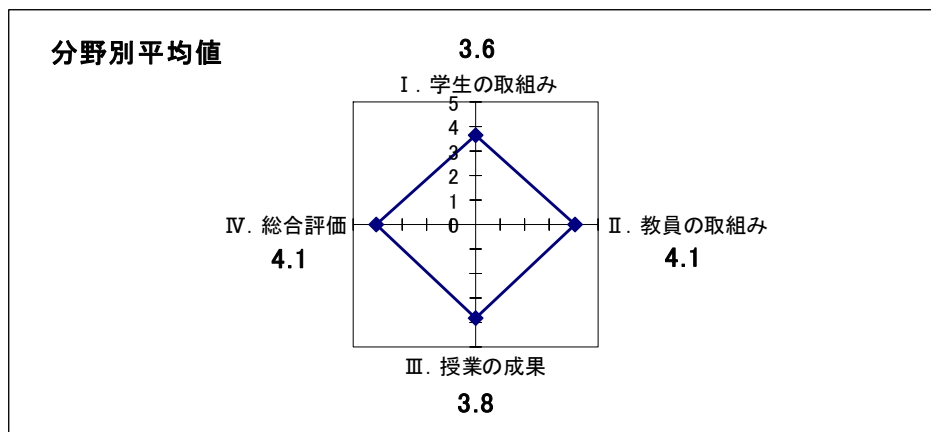
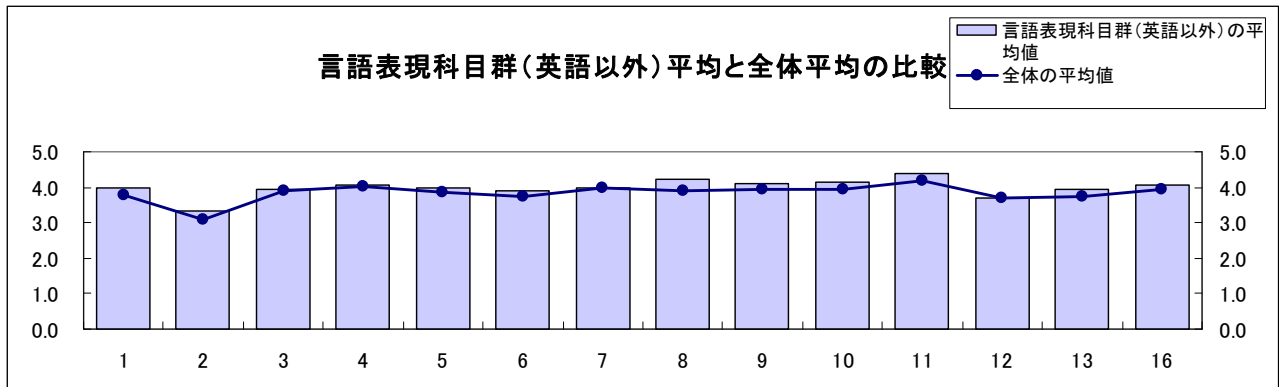
玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語以外

回答数(全体): 837

分野	設問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.0	26.2%	49.5%	19.6%	3.8%	0.8%	2
	2 授業以外によく予習復習した	3.3	10.6%	32.6%	39.5%	12.9%	4.3%	0
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	32.8%	37.3%	23.1%	5.3%	1.6%	5
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	37.4%	36.1%	22.4%	3.4%	0.7%	3
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	32.1%	36.4%	27.9%	3.0%	0.6%	2
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	31.9%	35.0%	26.6%	4.8%	1.7%	6
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	43.2%	27.4%	18.7%	7.8%	2.9%	4
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.2	49.6%	29.9%	15.3%	3.7%	1.4%	2
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.1	40.2%	35.6%	19.4%	3.4%	1.4%	3
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.2	44.2%	33.3%	18.4%	2.9%	1.3%	4
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.4	56.4%	27.8%	13.4%	2.0%	0.4%	3
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	23.0%	40.3%	24.9%	9.4%	2.5%
13 授業の内容に興味をもてた		3.9	36.4%	31.9%	23.0%	6.3%	2.5%	5

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	43.2%	29.4%	20.0%	4.9%	2.4%	83



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成20年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

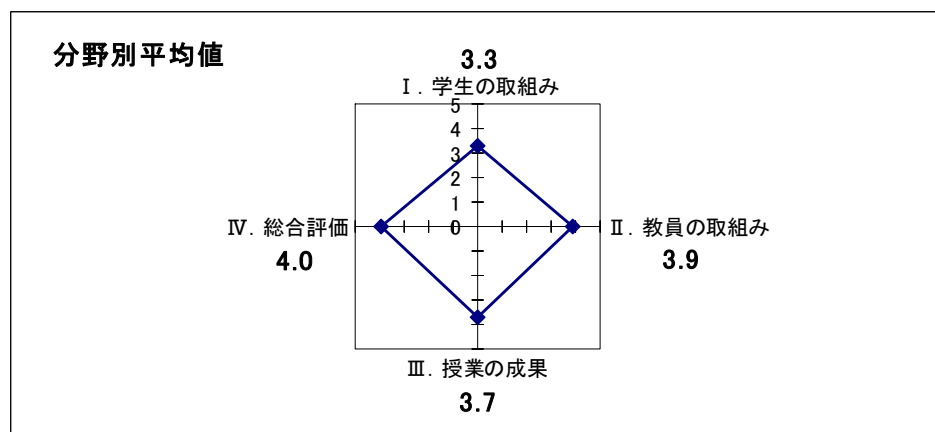
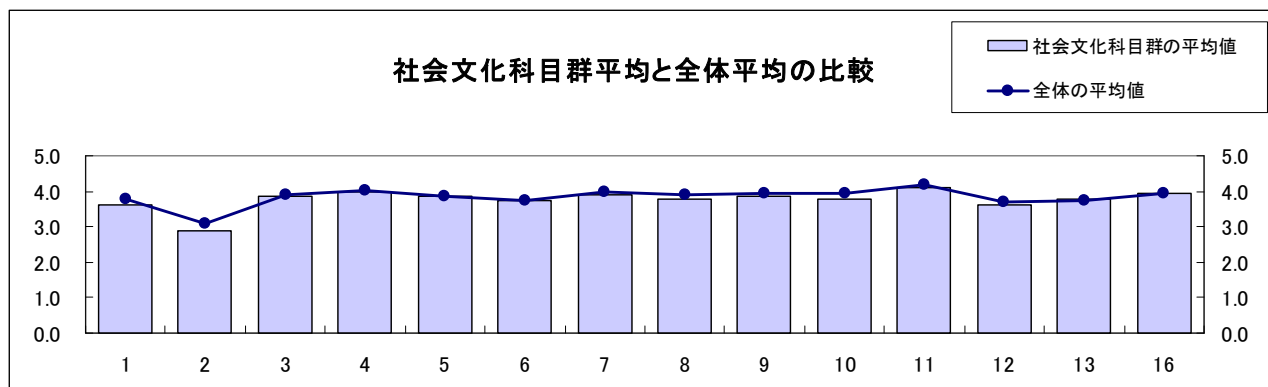
玉川大学

コア科目 社会文化科目群

回答数(全体): 3277

分野	設問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.6	17.3%	41.3%	30.6%	8.9%	1.8%	3
	2 授業以外によく予習復習した	2.9	8.8%	17.1%	40.3%	23.4%	10.4%	3
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	29.4%	37.5%	24.8%	6.6%	1.7%	9
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	35.9%	35.2%	23.4%	4.3%	1.3%	10
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	30.4%	33.9%	29.3%	4.9%	1.6%	20
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.7	29.8%	30.2%	27.9%	8.6%	3.5%	15
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	38.5%	27.4%	22.7%	7.9%	3.5%	10
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	31.0%	29.8%	28.2%	7.7%	3.3%	11
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	32.2%	33.2%	26.3%	6.1%	2.2%	12
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.8	30.2%	31.5%	28.5%	7.0%	2.8%	12
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	44.5%	28.6%	22.4%	3.0%	1.5%	9
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.6	22.6%	35.1%	28.8%	9.7%	3.8%
13 授業の内容に興味をもてた		3.8	31.8%	32.2%	24.1%	7.6%	4.3%	24

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	38.3%	30.5%	22.2%	6.1%	2.9%	405



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成20年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

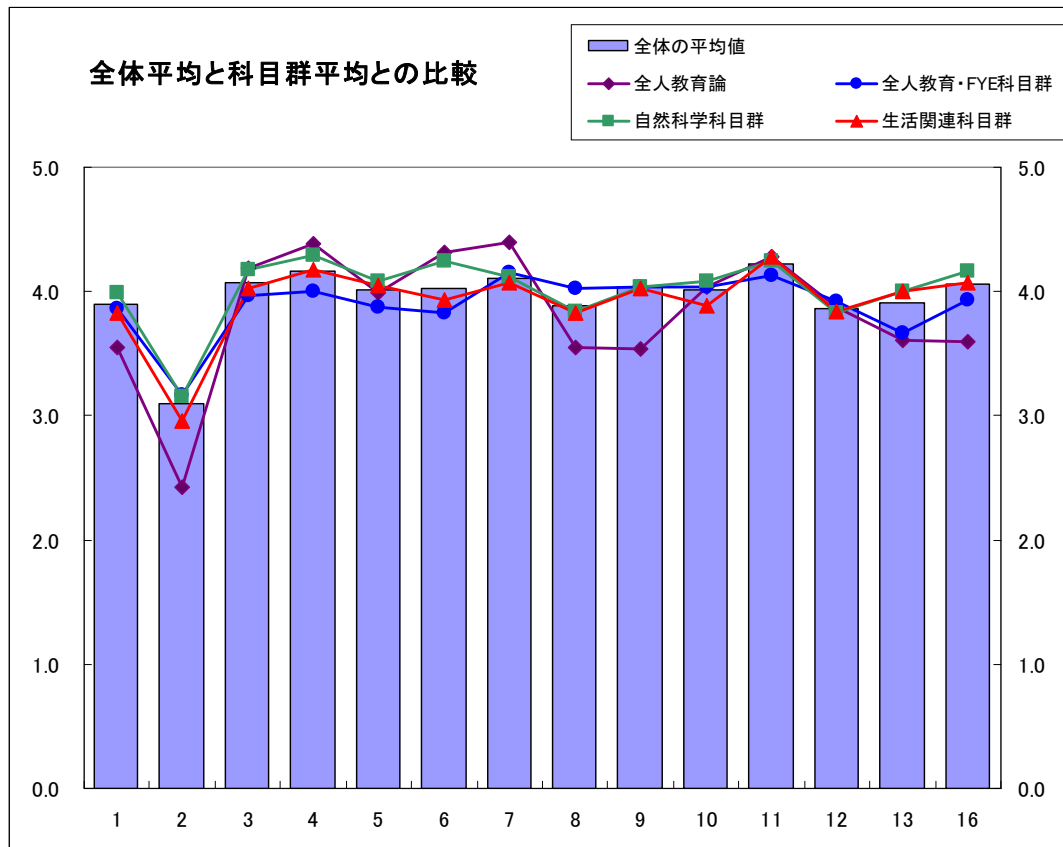
玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 6084

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	26.9%	43.6%	23.6%	4.5%	1.4%	7
	2 授業以外によく予習復習した	3.1	11.7%	21.8%	39.1%	19.1%	8.3%	13
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	36.2%	39.6%	20.0%	3.5%	0.7%	16
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	42.3%	36.1%	18.2%	2.7%	0.6%	12
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	35.4%	36.0%	24.4%	3.3%	1.0%	13
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	38.0%	33.8%	21.7%	5.3%	1.2%	30
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	44.5%	30.5%	18.0%	5.4%	1.5%	18
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.9	34.5%	30.8%	25.9%	6.6%	2.1%	11
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	38.0%	34.4%	22.1%	4.3%	1.3%	17
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	37.2%	33.5%	23.6%	4.4%	1.4%	17
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	46.9%	32.3%	17.8%	2.4%	0.7%	18
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	29.1%	37.9%	25.0%	5.9%	2.1%
13 授業の内容に興味をもてた		3.9	34.9%	32.8%	23.3%	6.0%	3.0%	44

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	41.7%	31.2%	20.7%	4.2%	2.2%	575



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を
除いた平均値

平均値 = (「5」回答数
× 5 + 「4」回答数 × 4 +
「3」回答数 × 3 + 「2」回
答数 × 2 + 「1」回答数 ×
1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミ
スの数

平成20年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

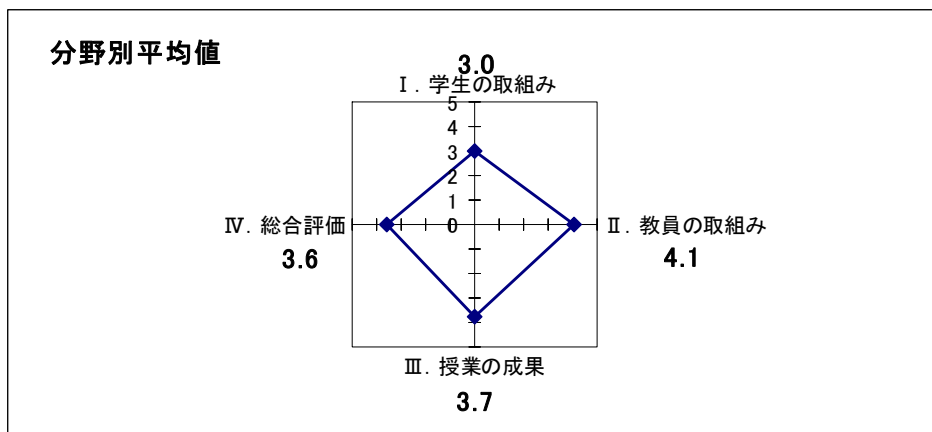
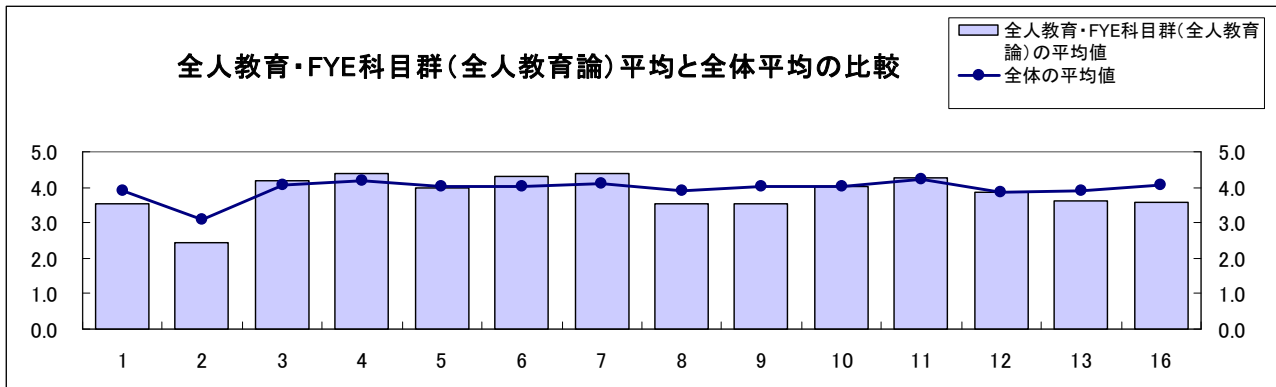
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 全人教育論

回答数(全体): 71

分野	設問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.5	21.1%	31.0%	33.8%	9.9%	4.2%	0
	2 授業以外によく予習復習した	2.4	8.6%	4.3%	34.3%	27.1%	25.7%	1
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.2	38.0%	43.7%	16.9%	1.4%	0.0%	0
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.4	48.6%	41.4%	10.0%	0.0%	0.0%	1
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	35.2%	31.0%	32.4%	0.0%	1.4%	0
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.3	45.7%	41.4%	11.4%	1.4%	0.0%	1
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.4	52.1%	35.2%	12.7%	0.0%	0.0%	0
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.5	21.1%	28.2%	38.0%	9.9%	2.8%	0
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.5	25.4%	21.1%	39.4%	9.9%	4.2%	0
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	35.2%	35.2%	28.2%	1.4%	0.0%	0
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	46.5%	35.2%	18.3%	0.0%	0.0%	0
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	32.4%	32.4%	26.8%	7.0%	1.4%
13 授業の内容に興味をもてた		3.6	31.0%	22.5%	29.6%	9.9%	7.0%	0

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.6	27.1%	28.8%	30.5%	3.4%	10.2%	12



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成20年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

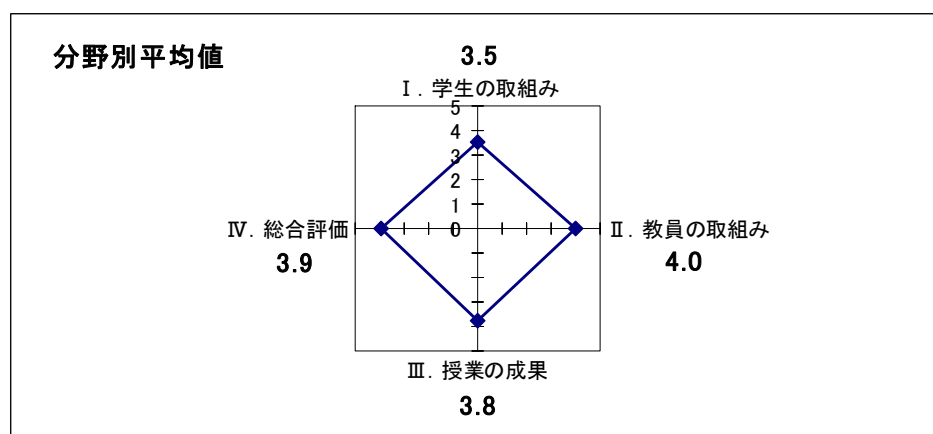
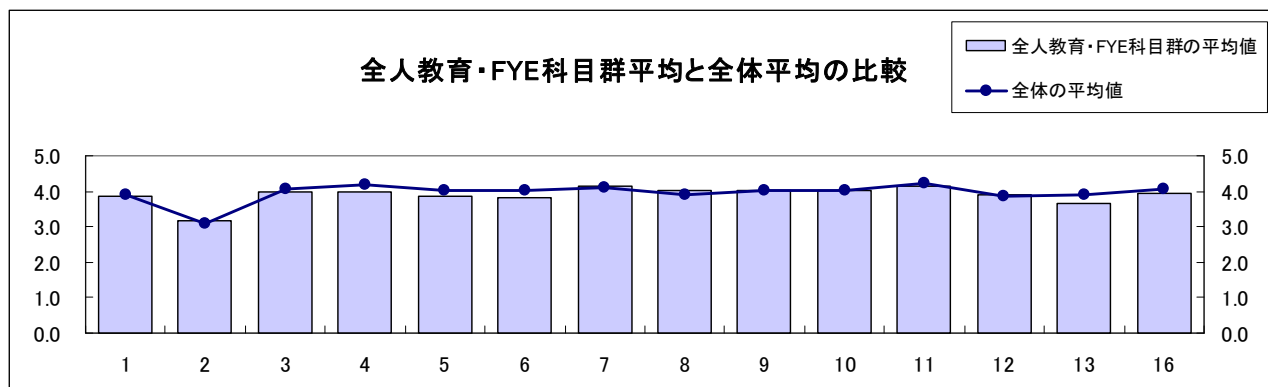
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群

回答数(全体): 1789

分野	設問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	24.7%	44.9%	24.2%	4.4%	1.8%	0
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	12.8%	23.7%	38.5%	17.1%	7.8%	2
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	30.0%	42.6%	22.7%	3.9%	0.8%	1
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	32.2%	40.4%	23.0%	3.6%	0.7%	4
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	29.6%	36.0%	28.4%	4.8%	1.2%	3
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.8	28.6%	35.4%	28.0%	6.6%	1.5%	4
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	44.4%	32.6%	17.4%	4.5%	1.1%	6
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.0	37.1%	34.7%	23.1%	4.1%	1.0%	3
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	36.6%	36.5%	21.8%	3.9%	1.2%	6
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	36.8%	34.8%	24.0%	3.5%	0.9%	3
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	41.6%	33.7%	21.5%	2.5%	0.8%	6
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	28.6%	40.7%	25.8%	3.5%	1.4%
13 授業の内容に興味をもてた		3.7	23.7%	34.1%	31.5%	6.6%	4.0%	14

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.9	35.3%	32.5%	24.9%	4.3%	3.0%	31



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成20年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

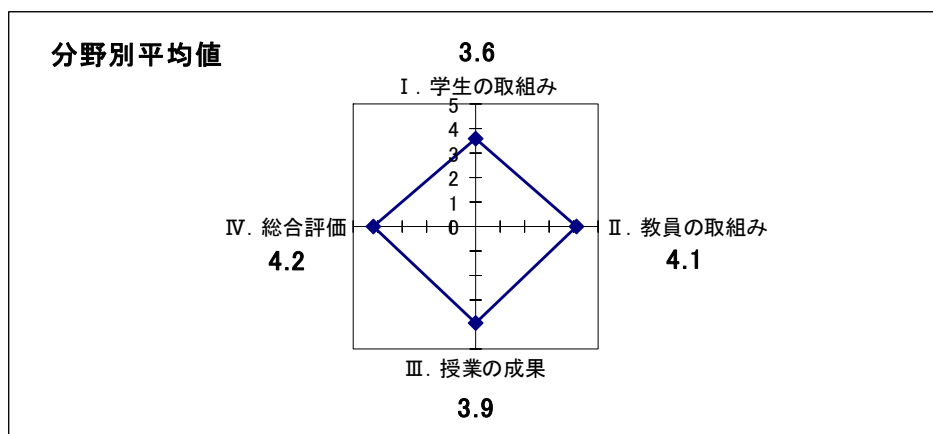
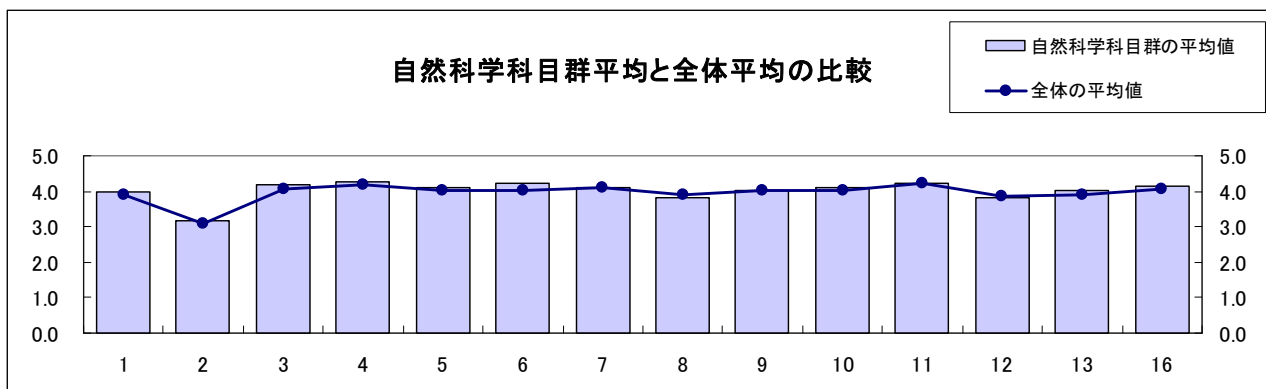
玉川大学

コア科目 自然科学科目群

回答数(全体): 2330

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	4.0	31.0%	42.8%	21.9%	3.3%	1.0%	6
	2 授業以外によく予習復習した	3.2	12.9%	23.4%	37.7%	18.7%	7.3%	6
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.2	41.9%	38.3%	16.5%	2.6%	0.7%	8
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.3	49.9%	32.4%	15.0%	2.1%	0.6%	3
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.1	39.7%	34.8%	21.3%	3.0%	1.2%	6
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.2	48.4%	32.6%	15.1%	3.1%	0.9%	5
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	44.3%	31.2%	17.9%	5.0%	1.6%	5
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	32.5%	29.8%	28.7%	7.1%	1.9%	5
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	37.6%	34.7%	22.8%	3.8%	1.1%	7
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.1	40.5%	33.7%	21.1%	3.6%	1.1%	6
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	47.4%	33.1%	16.7%	2.0%	0.8%	8
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	28.3%	37.7%	25.3%	6.5%	2.3%
13 授業の内容に興味をもてた		4.0	38.5%	33.8%	19.7%	5.7%	2.3%	18

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	45.2%	32.0%	17.9%	3.4%	1.5%	295



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成20年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

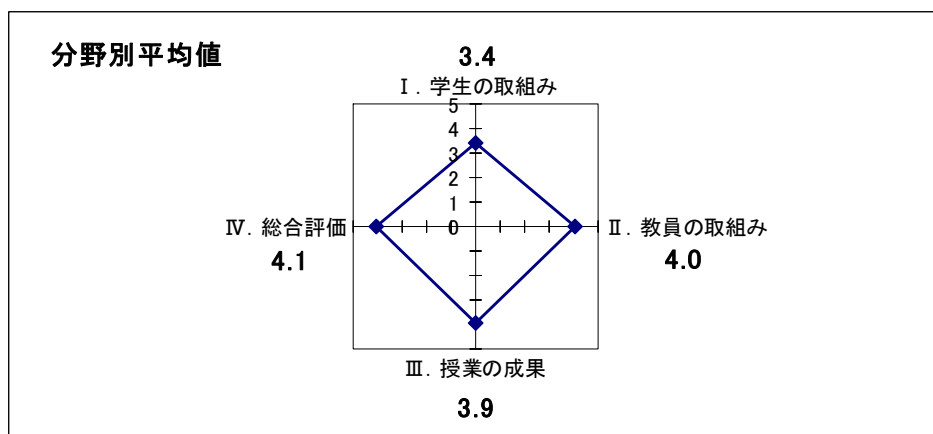
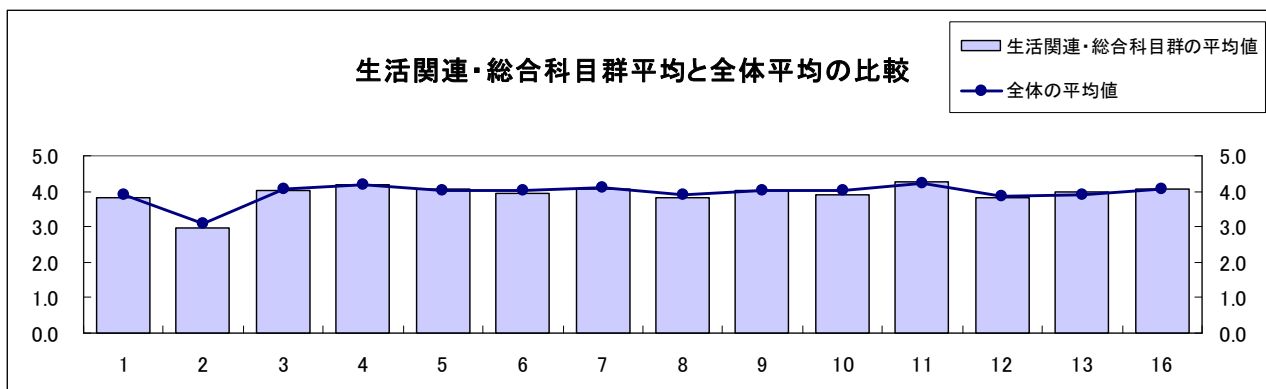
玉川大学

コア科目 生活関連・総合科目群

回答数(全体): 1965


分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	24.1%	43.3%	24.9%	6.1%	1.5%	1
	2 授業以外によく予習復習した	3.0	9.1%	18.3%	41.3%	21.4%	9.8%	5
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	35.0%	38.5%	21.6%	4.3%	0.6%	7
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	42.4%	36.7%	17.7%	2.6%	0.6%	5
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.1	35.7%	37.3%	24.2%	2.3%	0.5%	4
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	34.3%	33.9%	23.9%	6.7%	1.2%	21
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	44.9%	27.8%	18.7%	6.8%	1.7%	7
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	34.7%	28.5%	25.1%	8.3%	3.4%	3
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	39.6%	32.1%	21.4%	5.4%	1.5%	4
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	33.7%	32.0%	26.1%	6.0%	2.1%	8
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	51.0%	30.0%	15.7%	2.7%	0.5%	4
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	30.5%	35.7%	23.9%	7.4%	2.6%
13 授業の内容に興味をもてた		4.0	40.7%	30.5%	20.1%	5.7%	3.0%	12

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	44.1%	28.9%	19.7%	5.0%	2.3%	249



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数



参 考 资 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事要旨

第 1 回大学 FD 委員会議事要旨

日 時：平成 20 年 6 月 18 日（水） 13:00～15:00

場 所：教学事務棟 150・151 会議室

出席者：（委員長） 島川聖一郎

（副委員長） 菊池重雄

（委員） 平高典子、河野 均、高千穂安長、林 三雄

小嶋正敏、切田節子

（事務担当） 茂村恭司、山崎千鶴、柳原達宏

欠席者：（委員） 山田博三、金井茂夫

（事務担当） 大野太郎

* 敬称略

議 案：（1）平成 19 年度 F D 活動報告書に関する件
（2）「大学 F D 研修」の開催に関する件
（3）コア科目担当者研修会に関する件
（4）平成 20 年度プレゼンテーション研修に関する件

報 告：（1）コア科目 学生による授業評価アンケートについて
（2）「大学改革トップセミナー」参加報告について

議事要旨：

今年度の F D 委員紹介のあと、島川聖一郎委員長の司会により議事が進行した。

（1）平成 19 年度 F D 活動報告書に関する件

事務担当の茂村教務課長より、資料に基づき説明。

本報告書の製作にあたり委員の方々にお世話になったことに対する謝礼と合わせ、本報告書を基に、F D 活動をお進めいただきたいとの旨が述べられた。あわせて、これから各学部に本報告書を配布するにあたってのタイミングについて確認。

本件について、島川委員長より、大学の第三者評価の折に問われるポイントとして授業参観が含まれているので、その点に留意してほしい、また、多忙であるとはいえ、授業参観がいつ、どこで行われるのかがはっきりと決まってしかも発表されているということも大切であるので、その点について心がけてほしいとの旨が述べられた。

さらに菊池重雄副委員長より、教員の授業参観についてはeエデュケーションセンターの協力を得てDVDに録画しあとで見ることも可能である、同じ分野の先生同士で共有することも大切なことと考えるので活用してほしい、との旨が述べられた。

(2) 「大学FD研修」の開催に関する件

茂村課長より、昨年実施されたFD研修に関するアンケート調査の資料に基づいて説明。そのあと、各委員より学部の意見や案を発表。

<文学部>：平高典子委員

アンケートの回答率が低いことに責任を感じた。全体として、研修そのものについては否定的ではないが、希望する内容についてはさまざまである。外国人の先生からは、自分たちが行ってもわかるような研修がないとの声があった。プレゼンテーション研修は外国人の先生でもわかる内容だとよい。

<農学部>：河野 均委員

このアンケートを通して、先生方がどれくらい研修に対して関心を持っているかがわかったように感じた。傾向としては、授業中にもっと学生とコミュニケーションが取れるようになるものとか授業の改善事例の具体的なものなど。プレゼンテーションの研修を受けても、パワーポイントを授業で使うとなると施設上の問題もあるかと感じている。あと、新任教員の研修で、FDについての研修があってもよいかと思う。

<経営学部>：高千穂安長委員

研修に対する総論としてのニーズはあるが、個別には希望はさまざまである。新しく来たばかりの先生方には、授業での教え方についての基礎的研修が必要である。異なる授業形態で学生をどうリードするかといった研修も必要（あるひとつのパターンについてだけの研修だと当てはまらないケースもある）。

<芸術学部>：林 三雄委員

学部では、ブラックボードの活用についての研修をスタートしている。今年入学してきた1年生は、忘れ物をする者が多い。レポートの提出期限も守らないなど、今までの学生たちと明らかに質が違ってきている。こうした学生たちにどのように対応するかというような研修も必要だと感じている。

<リベラルアーツ学部>：小嶋正敏委員

アンケート調査の後、学部で2月に研修を行い文部科学省の方を講師にお願いして講演を開催し、教員のニーズに応えた。教育法規についての理解や大学設置基準など全員で共通の認識に立ちたいと考えた。学部の完成に向け、教育理解と教育内容

が問われると思っている。大学の入り口と出口の間の部分をいかに保証するかという点は、今まで入試広報部やキャリアセンターとの情報が意外にできていなかったと考える教員からの指摘による。

<学術研究所>：切田節子委員

プレゼンテーション研修の際に、参加された先生方に研修の希望を聞いている。プレゼンテーション研修自体についてもいろいろと希望がある（たとえば、授業の内容を知っている先生同士のプレゼン研修をしたいとか、実験の仕方について学びたいとか）。ことしは、プレゼンテーション研修以外にも新しいメニューを作っていければと考えている。

<島川委員長>

FD研修のことが言われて日が経つが、現在は制度導入期を終えて一段落したところではないだろうか。今後は、制度がいかに有機的に結びついているかが問われよう。そして、制度を有機的に結びつけてほしいというのが、中教審の答申で言われていることでもある。つまり、プロセス管理をしてほしいということである。ここに、FD活動の創意工夫をするところがあるだろう。

各個人が抱える、「どうしたら効果的な授業ができるか」という問題。我々は専門分野を学んでいるが、大学で教えることについては「無免許」である。今まではこの問題に自主的・主体的に取り組んできたのだが、今後は、分野別にベンチマークが提示されるだろう。高等教育の水準を上げるといえるときに、学生の前に教員の水準を上げる必要があるだろう。こうした状況を認識することが私たちの出発点である。

すでに東京大学では、ケンブリッジ大学やハーバード大学とベンチマークのセミナーを実施し、報告書も出している。ワークロードを示しているところもある。これから評価されるのは、大学の授業における予習を何で担保しているのかということである。実際に、アメリカの大学では難しいほどの量の予習を課される。負荷をどう課すかがこれから問われる。それが明示されることが大切である。

各学部で人材育成目標が掲げられた。理念として掲げるのはよいが、そこから下にすべて落ちていなければならない。今後はそういう観点から見させてほしいと思っている。学科の授業で何を教え、何を身につけさせようとしているかが欠けているように感じられる。科目で何を教えるかをオープンにすることがFDの出発点になるのではないかと思う。学生たちは、学部横断的に学ぶようになってきている。他学部の科目を受けることでどのような力をつけることができるか。それを誰がアドバイスしうるのかも考える必要がある。

学生の学べる幅を一覧できるようなものが今はまだない。ウェブは、検索対象が決まっている時にはよいが、一覧性の観点から見ると不都合だと思う。学生が手に取れる物が必要である。授業には、それを通して身につけられる主な力と、副次的に身につけられる力があると考えている。そういう副次的な力をつけるために学生が

その科目を取るということもまたよい。

<菊池重雄副委員長>

今回のアンケートの結果をそのまま信じるのは危険だと考える。

大事なものは、第一にワークロードを提示すること。授業で伝えられなくても、テキストを読んでもらえれば済むという部分もある。今回のアンケートで「シラバス」についてはポイントが低かったが、これを重要視しなくてよいのだろうか。シラバスの問題は、実は非常に重要である。

ITは、時間とともに自ずと備わってくるものである。Bの「教育関連法規」やCの「教育界の動向」、Dの「玉川大学に関する事項」は、受講対象を絞って実施してもよいと思う。短時間で学べる機会を数多く設けてはどうか。

プレゼンテーション研修については、時間が長すぎるという意見があるが、本当はもっと時間をかけて学ぶ必要がある、それこそ1泊2日くらいの日程でやってもよいのかもしれない。このように、腰をすえてやる必要のあるものはやってはどうか。そう考えると、まずはAの「授業に関する事項」から研修に取り組んではどうか。シラバス研修は、研修に参加し、目標を立て評価が出る、というふうにする必要がある。そうすれば実際にシラバスが出たときにそれをさらに指導することが可能になる。

そのほかの意見

- ・シラバスをまったく読まないでいる学生が多いと感じる。今後はきちんとシラバスを読んでから履修するよう指導を徹底する必要がある。自由に受講科目を選べるようになってきているが、科目をどう有機的に結び付けられるかを示すことも大切である。
- ・シラバスを見て科目を決めるのは、必ずしもよい決め方ではない。例えば、経済学を例にとるならば、どの大学でとってもしっかりと身につかねばならない。日本では、シラバスが過大評価されている。本来、ベンチマークの内容が教えられねばならない。今日の授業の到達目標、1単位時間4,000円という授業の到達目標が何なのかということが大切である。

(3) コア科目担当者研修会に関する件

事務担当の山崎コア・FYE教育センター課長より資料に基づいて説明。

本研修会については、今年より、大学FD委員会ならびに人事部研修センターとの共催として進めていきたい。各日とも、10名ほど参加いただいている。

シラバスの作成については、昨年度に引き続き今年度も実施を予定している。

なお、ディベート研修などの様子をDVDで残してあるので、ご活用いただきたい。

(4) 平成 20 年度プレゼンテーション研修に関する件

茂村課長より、資料に基づいて説明。

6 月 27 日ころまでに、教務課に受講メンバーをお知らせいただきたい。

特に、新任の先生方を中心に出席をお願いしたい (切田委員)。

特別なケースで、9・10 限で事務室が閉まっていてアンケートを提出しにくい状況が見受けられたので対応願いたい (切田委員)。

報告要旨 :

(1) コア科目 学生による授業評価アンケートについて

山崎課長より資料に基づいて説明。

今年度も実施したい。実施日が近づいてから改めてご案内するので、回答率 100% に近づけられるよう、ご協力いただきたい。

(今までは約 8 割の達成率である。)

(2) 「大学改革トップセミナー」参加報告について

高千穂委員より資料に基づき報告。

以 上

第 2 回大学 FD 委員会議事要旨

日 時：平成 20 年 12 月 15 日（月） 17:15～19:00

場 所：研究・管理棟 210・211 会議室

出席者：（委員長） 島川聖一郎
（副委員長） 菊池重雄
（委員） 河野 均、高千穂安長、金井茂夫、林 三雄
小嶋正敏、切田節子
（事務担当） 茂村恭司、大野太郎、山崎千鶴、柳原達宏

欠席者：（委員） 平高典子、山田博三 *敬称略

議 案：（1）平成 21 年度採用の教員研修に関する件
（2）平成 20 年度 F D 活動報告書作成に関する件

議事要旨：

島川聖一郎委員長の司会により議事が進行した。

（1）平成 21 年度採用の教員研修に関する件 （資料 N o . 1～3）

今回の研修案の内容について、事務担当の茂村教務課長より資料に基づき説明。

本件に関する委員からの意見は以下のとおり：

- ・本学における新任教員研修は、他大学に比較すると「説明」が非常に多いので今後工夫する必要がある。
- ・昨今、ほとんどの教員は前職（大学）で授業評価を受けている。よって、F D とは何かを改めて説明する必要はないであろう。一方で教育訓練なしで入職される方もいるので、授業方法について学んでいただく必要も感じる。新任の先生方を当該学部でどのように教育していくかを学部長に出してもらおうという方法もある。入職面接の段階でどの先生がどのくらい理解しているかがわかるので、足りない部分を学部で補えるといよい。
- ・大学教員は人材育成の方法を持っていない。新任教員をどう学科になじませるかのプランを学部に出してもらおうと考えている。大学教員の人材育成は、今後の大きな課題であると考えている。
- ・入職にあたり、自分がわからないことを誰に聞けばよいかははっきりできるとよいと考えるし、同様の意見が他の F D 研修会の席でも出ていた。
- ・研修を、研修者（受講者）中心で作っていく必要があると考えている。
- ・現在行われている内容を組み替えて、1 日目と 2 日目でテーマを明らかにすると参加

者の理解が進むと考える。

- ・学部ごとのガイダンスは、参加者からの希望はあるもののこの計画の中で実施するには時間的に難しい。
- ・今まで説明している教学事項について、学士課程教育の文脈で言い直す必要がある部分も出てくるであろう。
- ・先生方にとっては、初めて勤める学校でどこに何があるかがわかることが安心につながる。そういうガイダンスを今回の研修とは別に学部ごとに設けてもらえるとよい。また、授業評価アンケートの項目についてもFDの説明の折にくわえるとよいのかもしれない。

本件については、検討の結果、次のとおり決定した。

1. 2日間のプログラムのうち、初日は「玉川大学の組織および概要、教員の業務と授業」、2日目は「研究費や事務手続き、サービスについて」をテーマとして内容を組みかえる。
2. 新任の先生方に送る研修プログラムでは、研修内容を大きな項目で括って表現する。
3. 今の玉川大学を紹介するビデオをプログラムに加える。
4. 校歌や学生歌は、CDを用意して渡す。
5. 昼食の時間は、お互いに話しやすい環境を作るとともに2日間の最後に懇談の時間を設けて、入職される先生方同士やFD委員の先生方との交流を深める。

(2) 平成20年度FD活動報告書作成に関する件 (資料 No. 4~7)

茂村課長より、資料に基づいて説明。本件については、資料にある項目・分担・スケジュールに沿って進めることとなった。

なお、本件に関する委員からの意見は次のとおり。

- ・授業評価の内容とシラバスの内容は、必ずしも一致しない。玉川でも他大学に先駆けて授業評価に取り組んできたが、すでにもう先駆けてと言える状況にはない。授業評価制度を取り入れたそもそもの目的は何だったのかをきちんと共有することが必要である：ひとつは、教育の質を高めるため、もうひとつは良い評価が学生の入学人数につながるということである。
- ・一生懸命に評価を報告してもらっているが、成果は上がっているだろうか。無力感を感じさせないようにするのが次の課題である。
- ・玉川大学のFD活動報告書は薄い。それはデータが少ないからではないだろうか。アセスメントをするなりして、データを残さないと評価されないのではと感じる。

- ・報告内容が現場にどう反映され、どういう結果に結びついているかをはっきりさせることが必要と考える。

以 上

参考資料 2. プレゼンテーション研修会アンケート用紙

各項目ごとにA～Eでランクをつけてください。

その際、Aは「全くそのとおり」、Eは「全くそのとおりでない」という評価です。

1. 全体についての感想をお聞かせください	A	B	C	D	E	フリーコメント
・総合的に満足されていますか						
・担当する授業に役立つと思いますか						
・ご自身のプレゼンテーション・スキルは向上したと思いますか						

2. 研修会の内容についてお聞かせください

・研修内容は適切でしたか (2日間という時間制約を考慮に入れてお答えください)						
・講師の説明は理解しやすかったですか						
・テキスト、教材、教具などは適切でしたか						

3. 研修会の運営についてお聞かせください

・2日間という日程は適切ですか (不適切な場合は、フリーコメントをご記入ください)						
・時間配分は適切ですか (不適切な場合は、フリーコメントをご記入ください)						
・開催場所、施設などは適切でしたか						
・事務手続き、連絡などは適切でしたか						

4. 今後のFD研修会についてお聞かせください

・この研修の開催を継続することに賛成ですか						
・この研修の受講を、他の人にも勧めますか						
・どんな内容の研修会を希望しますか (複数記入可)						

5. 具体的な技法について、裏面にお書きください。

6. その他の感想、コメントなどありましたら、別紙に自由にお書きください。

今後のFD研修会開催および運営の参考資料とさせていただきます。

参考資料 3. 「コア科目授業評価アンケート」用紙

玉川大学

—授業改善のための—

【コア科目】

平成20年度 学生による授業評価アンケート

このアンケート調査は授業担当教員が学生諸君と共に、授業をより改善することを目指して実施するものです。記入に当たっては、授業の全体を視野に入れた、責任ある評価をお願いします。なお、このアンケートがあなたの成績に影響することは一切ありませんので、氏名などは記入しないでください。

記入日 年 月 日 曜日 時限	学年 ①1年 ②2年 ③3年 ④4年 ⑤その他					
授業科目名	<table border="1"> <tr> <td>(非常に良い)</td> <td>ちやどろと思う (良い)</td> <td>どちらとも言えない (普通)</td> <td>あまりどろ思わない (あまり良くない)</td> <td>全くどろ思わない (良くない)</td> </tr> </table>	(非常に良い)	ちやどろと思う (良い)	どちらとも言えない (普通)	あまりどろ思わない (あまり良くない)	全くどろ思わない (良くない)
(非常に良い)		ちやどろと思う (良い)	どちらとも言えない (普通)	あまりどろ思わない (あまり良くない)	全くどろ思わない (良くない)	
担当教員名						
以下の質問について、該当する番号にひとつだけ○をつけてください。						
あなたの取り組み						
1 授業には意欲的に取り組んだ	5 4 3 2 1					
2 授業以外によく予習復習した	5 4 3 2 1					
教員の取り組み						
3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	5 4 3 2 1					
4 毎回よく授業の準備がされていた	5 4 3 2 1					
5 シラバスにそって授業が行われた	5 4 3 2 1					
6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	5 4 3 2 1					
7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	5 4 3 2 1					
8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	5 4 3 2 1					
9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	5 4 3 2 1					
10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	5 4 3 2 1					
11 教員は毎回熱意をもって授業をした	5 4 3 2 1					
授業の成果						
12 授業全体についてよく理解できた	5 4 3 2 1					
13 授業の内容に興味をもてた	5 4 3 2 1					
担当教員が科目毎に設定する設問						
14	5 4 3 2 1					
15	5 4 3 2 1					
総合評価						
16 この授業を受講してよかったと思う	5 4 3 2 1					
その他、意見、要望、感想など自由に記述してください。(裏面使用可)						

参考資料 4. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(目的)

第 1 条 玉川大学(以下「本大学」という。)教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD (ファカルティ・ディベロップメント) (以下「FD」という。)委員会(以下「本委員会」という。)を置く。

(組織)

第 2 条 本委員会は、委員長、委員、アドバイザー、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 3 学長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 4 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 5 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第 3 条 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第 4 条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

- 2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第 5 条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

第 6 条 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第 7 条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、教学部及び教育企画部とする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

平成 21 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8802 (教学部教務課)

042-739-8899 (教育企画部教育企画課)